HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	体制転換期クロアチアにおける第二次世界大戦をめぐる記憶の政治 ： 「和解」の論理と「ヨーロッパへの回帰」
Author(s)	宇野, 真佑子
Citation	スラヴ研究, 69, 1-32
Issue Date	2022-08-31
DOI	https://doi.org/10.14943/SlSt.69.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93468
Type	departmental bulletin paper
File Information	Slavic-Studies_69_1_Mayuko-Uno_.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

体制転換期クロアチアにおける第二次世界大戦をめぐる記憶の政治

――「和解」の論理と「ヨーロッパへの回帰」――

宇　野　真佑子

はじめに

第二次世界大戦をめぐるEUの公的な歴史認識は、2004年以降に加盟した中東欧・バルト諸国[1]のイニシアティヴによって大きく変化している。これらの国々はEUへの加盟をめざすにあたって自国における第二次世界大戦の記憶[2]のあり方を見直すことを迫られたが、加盟後には、ホロコーストが中心的な地位を占めるEUの記憶政策に異議を申し立てた[3]。その結果、欧州議会の決議などを通して形成されたEUの第二次世界大戦をめぐる歴史認識は、ナチズムの犯罪と共産主義の犯罪をいずれも「全体主義」による犯罪とみなして糾弾する性格のものへと変容している[4]。2013年にEUへ加盟したクロアチアでも、近年のEUにおける「反全体主義」を基盤にした第二次世界大戦観が、国内の記憶政策において、枢軸国に協力した極右ナショナリスト勢力であるウスタシャが行った犯罪の相対化に利用されていることが指摘されている[5]。

クロアチアにおける記憶政策の転換点は2000年である[6]。1990年代のクロアチアでは、フラニョ・トゥジマン率いる右派政党クロアチア民主同盟（Hrvatska demokratska zajednica, 以下HDZ）が政権を握っていたが、1999年12月にトゥジマン大統領が死去すると、

1　本論文において「中東欧諸国」は、第二次世界大戦後から1989–91年にかけて社会主義体制下にあったヨーロッパ諸国のうち、西ドイツに吸収された東ドイツを除く国々を指す。

2　記憶や歴史認識に関する研究の隆盛に伴い、「記憶」という語の語義も多様化している。本論文では、アンリ・ルソーの「過去全般、とりわけ過去の特定の出来事を表象するための言説、期待、要求、実践、政策、成果全てを含むもの」とする広い定義を採用する。アンリ・ルソー（剣持久木・末次圭介・南祐三訳）『過去と向き合う：現代の記憶についての試論』吉田書店、2020年、16頁。

3　Maria Mälksoo, “The Memory Politics of Becoming European: The East European Subalterns and the Collective Memory of Europe,” *European Journal of International Relations* 15, no. 4 (2009), pp. 653–680; 橋本伸也『記憶の政治：ヨーロッパの歴史認識紛争』岩波書店、2016年、110–113頁。

4　橋本『記憶の政治』128–130頁 ; Ana Milošević and Heleen Touquet, “Unintended Consequences: The EU Memory Framework and the Politics of Memory in Serbia and Croatia,” *Southeast European and Black Sea Studies* 18, no. 3 (2018), p. 385.

5　Milošević and Touquet, “Unintended Consequences,” pp. 381–399; Taylor McConnell, “Erasing Yugoslavia, Ignoring Europe: The Perils of the Europeanisation Process in Contemporary Croatian Memory Politics,” in Ana Milošević and Tamara Trošt, eds., *Europeanisation and Memory Politics in the Western Balkans* (Cham: Palgrave Macmillan, 2021), pp. 49–73.

6　石田信一「クロアチア共和国」月村太郎編著『解体後のユーゴスラヴィア』晃洋書房、2017年、62頁。

2000 年に実施された選挙で中道左派・リベラル政党の連合が勝利した。この政権交代以後、EU 加盟交渉を意識した変革の一環として、第二次世界大戦中・終戦直後のクロアチアで行われた大量殺害に対する追悼をはじめとした各種の記憶政策に変化がみられた[7]。2003 年の議会選挙でふたたび HDZ が政権を握ったのちも、第二次世界大戦をめぐる記憶政策は、EU 加盟を見据えたうえで、ウスタシャの再評価からは明確に距離を置いて「反ファシズム」を強調する路線を継続した[8]。その一方で、第二次世界大戦をめぐる 2000 年以降の記憶政策は、クロアチア紛争をめぐる記憶政策とも結びつきながら、クロアチア人を第二次世界大戦の「犠牲者」に位置づけるという特徴を保ったこともまた明らかにされている[9]。

1990 年代のクロアチアにおける記憶政策の最も重要なキーワードの 1 つが、トゥジマンが提唱した「国民的和解（nacionalno pomirenje）」である[10]。この理念は、ウスタシャと、共産党が指導したパルチザンについて、両者をともにクロアチア民族のために戦っていたとみなし、第二次世界大戦の歴史をめぐるクロアチア人どうしの対立を解消しようとするものであった。「国民的和解」については、トゥジマンの著作や発言を詳細に分析した研究が発表されている[11]。その一方で、「国民的和解」は必ずしもクロアチアで広範な支持を得る主張ではなかった[12]にもかかわらず、先行研究では「国民的和解」に対して行われた同時代の批判を詳細に分析するものは少ない[13]。さらに、紛争直前のクロアチアにおいて「和解」をめぐっ

7 Tamara Banjeglav, “Sjećanje na rat ili rat sjećanja? Promjene u politikama sjećanja u Hrvatskoj,” in Darko Karačić, Tamara Banjeglav and Nataša Govedarica, *Re:vizija prošlosti: Službene politike sjećanja u Bosni i Hercegovini, Hrvatskoj i Srbiji od 1990. godine* (Sarajevo: ACIPS, 2012), pp. 110–124; Vjeran Pavlaković, “Remembering War the European Way: Croatia’s Commemorative Culture on the Eve of EU Membership,” in Pero Maldini and Davor Pauković, eds., *Croatia and the European Union: Changes and Development* (London: Routledge, 2016), pp. 117–137.

8 Banjeglav, “Sjećanje na rat ili rat sjećanja?,” p. 111; Ljiljana Radonić, “Croatian Politics of the Past – Just One More Post-communist Case Study?,” *Istorija 20.Veka* 30, no. 1 (2012), pp. 203–215.

9 Radonić, “Croatian Politics of the Past–Just One More Post-communist Case Study?,” pp. 203–215; Davor Pauković, “Framing the Narrative about Communist Crimes in Croatia: Bleiburg and Jazovka,” in Vjeran Pavlaković and Davor Pauković, eds., *Framing the Nation and Collective Identities: Political Rituals and Cultural Memory of the Twentieth-Century Traumas in Croatia* (London: Routledge, 2019), pp. 99–118; 門間卓也「ヤセノヴァツ追悼式典を巡る「犠牲の記憶」：ナショナリズムと「反ファシズム」の政治潮流に注目して」『ロシア・ユーラシアの社会』1048 号、2020 年、21–39 頁。

10 クロアチア語の nacionalni という形容詞は「民族的」と訳すことも可能であるが、日本の先行研究における「国民和解」の訳語を踏襲し、「国民的」と訳した。また、トゥジマンは「国民的和解」と同義で pomirba（和解）という語を使用することもあった。石田信一「旧ユーゴスラヴィア諸国と第二次世界大戦をめぐる歴史認識」『地域研究』12 巻 1 号、2012 年、252–267 頁 ; 門間「ヤセノヴァツ追悼式典」。

11 Alex J. Bellamy, *The Formation of Croatian National Identity: A Centuries-Old Dream?* (Manchester: Manchester University Press, 2003); Stevo Đurašković, “Nation-building in Franjo Tuđman’s Political Writings,” *Politička misao* 51, no. 5 (2014), pp. 58–79; Stevo Đurašković, “National Identity-Building and the “Ustaša-Nostalgia” in Croatia: The Past That Will Not Pass,” *Nationalities Papers* 44, no. 5 (2016), pp. 772–788.

12 石田「クロアチア共和国」58–59 頁。

13 Albert Bing, “Hrvatsko proljeće (Miko Tripalo i Ivan Supek) i vrijeme promjena: Kontinuitet

てせめぎあいがあったことには注目されておらず、本論文でとりあげる「市民的和解」の提言について言及する文献も、その背景や提言に対する批判には目を配っていない[(14)]。この時期の「和解」をめぐる論争を検討することで、とくに 1990 年代に政権を批判する立場であった左派およびリベラルが、「国民的和解」をどのような論理によって批判し、自らの主張を展開したのかということを明らかにできる。

体制転換後の中東欧・バルト諸国では、ヨーロッパの一員としてのアイデンティティを持ち、EU や NATO への加盟をめざすとともに政治的・経済的改革を進める「ヨーロッパへの回帰」と呼ぶべき志向が広くみられたが、クロアチアもまた例外ではなかった[(15)]。クロアチアにおける第二次世界大戦をめぐる記憶の政治は、ユーゴスラヴィア連邦やセルビアとの関係において検討されることが多い。しかし、本論文が対象とするユーゴスラヴィア解体直前の時期のクロアチアにおいて「ヨーロッパ」がしばしば参照点とされていたことは、第二次世界大戦をめぐる記憶の政治にも反映されていた。

以上の問題意識を踏まえて、本論文は、1980 年代末から 1990 年代初頭のクロアチアにおいて、当時の政治情勢と第二次世界大戦の歴史がどのように結びつけられ、その過去に対する向き合い方が模索されたのかを、「ヨーロッパへの回帰」という当時の政治的潮流と、「和解」というキーワードに注目して検討する。主要な史料として、1990 年の選挙前に発表された各政党の綱領集[(16)]、当時の新聞・雑誌を用い、政治家や知識人、退役兵団体などが第二次世界大戦をめぐって公的に発信した主張と、それらの相互の影響を明らかにする。とくに、ザグレブで発行されていた大手週刊誌『ダナス』[(17)]およびスプリトで発行されていた日刊紙

---

demokratske evolucije hrvatske politike na prijelazu osamdesetih u devedesete godine 20. stoljeća," in Tvrtko Jakovina ed., *Hrvatsko proljeće 40 godina poslije* (Zagreb: Centar za demokraciju i pravo Miko Tripalo, Filozofski fakultet, Fakultet političkih znanosti, Pravni fakultet Sveučilišta u Zagrebu, 2012), pp. 353–384; Ljiljana Radonić, "Croatia's Politics of the Past during the Tuđman Era (1990–1999)—Old Wine in New Bottles?" *Austrian History Yearbook* 44 (2013), pp. 234–254.

14 Bette Denich, "Dismembering Yugoslavia: Nationalist Ideologies and the Symbolic Revival of Genocide," *American Ethnologist* 21, no. 2 (1994), p. 379; Mate Nikola Tokić, "Framing and Reframing the Past: Ethnic Relations, Political Legitimacy and the Legacy of the Second World War in Socialist Yugoslavia, 1945–1991" (PhD diss., University of Pennsylvania, 2007), pp. 358–359.

15 Sharon Fisher, *Political Change in Post-Communist Slovakia and Croatia: From Nationalist to Europeanist* (New York: Palgrave Macmillan, 2006), p. 3. なお、1990 年代のクロアチアにおいて「ヨーロッパへの回帰」という表現そのものが一次史料に頻出するわけではないが、先行研究では当時のクロアチアの政治的潮流を分析する概念として広く用いられている用語である。

16 Dragan Đurić, Bojan Munjin, and Srđan Španović, eds., *Stranke u Hrvatskoj* (Zagreb: Radničke novine, 1990).

17『ダナス』は、1982 年から 1992 年までクロアチアの国営新聞社ヴィエスニク（Vjesnik）の傘下で発行されていた週刊誌である。同誌は 1990 年の政権交代後も HDZ に批判的な態度をとったことから、政権の圧力を受けて経営難に陥った。部数については、ケマル・クルスパヒッチが最盛期の部数を 20 万部であるとする一方で、ヤスミナ・クズマノヴィチは 1990 年春の選挙時に 18 万部、紛争直前に 6 万部であるとするなど、文献によって記述が異なる。Jasmina Kuzmanović, "Media: The Extension of Politics by Other Means," in Sabrina Petra Ramet and Ljubiša S. Adamovich, eds., *Beyond Yugoslavia: Politics, Economics, and Culture in A Shattered Community* (Boulder: Westview Press, 1995), p. 93; Kemal Kurspahic, *Prime Time Crime: Balkan Media in War and Peace* (Washington D.C.: United States Institute of Peace, 2003), pp. 83–84.

『スロボドナ・ダルマチア』を中心的に用いる。『ダナス』は、1987年に早くも市場経済や複数政党制などを求める知識人の寄稿を掲載するなど、体制転換前から開放的な気風の雑誌として知られていた[18]。また『スロボドナ・ダルマチア』は地方紙ではあるがクロアチア全域に流通し、紙面ではダルマチア以外の地域のニュースも報道する、10万部以上の発行部数を誇る大手紙であった[19]。両者はいずれも、1980年代末から1990年代初頭の時期には体制に対して批判的な論調の記事も掲載していたことで知られるクロアチアの主要メディアである[20]ことから、選挙以前の社会主義体制に批判的な勢力あるいは選挙以後のHDZに批判的な勢力がそれぞれ展開していた主張や、それらに対する反響を追ううえで有用であると考えられる。

以下では、第1節で、社会主義期のユーゴスラヴィアにおける第二次世界大戦についての公的な歴史観とそれに対する挑戦の動きを整理する。次いで第2節では、クロアチアの体制転換における「ヨーロッパへの回帰」をめぐる諸勢力の主張を示す。また、体制転換に伴い第二次世界大戦をめぐって勃発した論争を、通りや広場の改称をはじめとする記憶政策への反応から検討する。第3節では、体制転換期のクロアチアにおいて、第二次世界大戦の過去に対する向き合い方として、社会主義期の理念を引き継ぐもの、「国民的和解」、「市民的和解」という3つの形がそれぞれ重なりつつ構想されていたことを示すとともに、それらの提言がそれぞれの形で「反ファシズム」を解釈し、「ヨーロッパへの回帰」という目標と結びつけていたことを明らかにする。結びとして、1990年代初頭のクロアチアで、当時優勢であったナショナリスト勢力と彼らを批判する勢力がそれぞれ打ち出した、第二次世界大戦の位置づけおよび「和解」の提言の特徴を提示する。

1. ユーゴスラヴィアにおける第二次世界大戦

1-1. 第二次世界大戦中・戦後のユーゴスラヴィア

1941年4月6日、枢軸軍がユーゴスラヴィア王国に侵攻し、王国を分割占領した。4月10日には、ドイツおよびイタリアの後押しを受けて、現在のクロアチアおよびボスニア・ヘルツェゴヴィナ両国の大部分を領土とするクロアチア独立国（Nezavisna Država Hrvatska, 略称NDH）の建国が宣言された。

18　Kurspahic, *Prime Time Crime*, p. 62.

19　1980年代の発行部数は10万部前後であったとされるが、筆者が主に調査した1990–91年の期間では、紙面に記載された発行部数が14万部を超える日もみられた。また、クルスパヒッチによれば、『スロボドナ・ダルマチア』はクロアチアの代表的な全国紙であった『ヴィエスニク』よりも広く流通していた。クルスパヒッチは、『ヴィエスニク』は1990年から92年にかけての期間で部数を8万部から2万部まで落としたと記している。Sven Balas, “Voices of Opposition in Croatia,” in Jasmina Udovički and James Ridgeway, eds., *Yugolavia's Ethnic Nightmare: The Inside Story of Europe's Unfolding Ordeal* (New York: Lawrence Hill Books, 1995), p. 214; Kurspahic, *Prime Time Crime*, pp. 62, 64.

20　『スロボドナ・ダルマチア』は紛争初期にはトゥジマン政権に批判的な論調を残していたものの、1993年には株式の大部分をトゥジマンと懇意の実業家ミロスラヴ・クトレに買い取られ、親政府的な論調のメディアとなった。Kurspahic, *Prime Time Crime*, pp. 133, 188.

クロアチア独立国の政権を担ったウスタシャは急進的なクロアチア・ナショナリスト組織であり、思想的にはファシズムとナチズムの影響を強く受けていた[21]。ウスタシャは、1929年にイタリアへ亡命したアンテ・パヴェリッチをトップとして、1930年代からクロアチア民族国家の設立を掲げてテロ活動などを行っていた。ウスタシャは1941年から1945年まで、セルビア人・ユダヤ人・ロマなどの組織的な殺害を行った[22]。クロアチア独立国内に設置された収容所のなかでも、ヤセノヴァツ強制収容所は領内で最大の絶滅収容所であり、1941年8月から、終戦直前の1945年4月まで稼働していた。ウスタシャの虐殺による死者数は正確には不明だが、ヤセノヴァツ強制収容所の犠牲者のうち、氏名が明らかになっている人びとだけでも83145人にのぼる[23]。

ユーゴスラヴィアにおける第二次世界大戦の初期には、大セルビア主義を掲げるセルビア人軍人らの武装組織チェトニクと、ユーゴスラヴィア共産党が指導したパルチザンが、枢軸軍や対独協力勢力に対する主要な抵抗勢力となった。反共産主義を掲げるチェトニクは、当初イギリスの支持を得ていたものの、概して枢軸軍に対しては待機戦術をとったうえ、戦況に応じて枢軸軍との協力をはかった。第二次世界大戦中には、チェトニクもまた多くのムスリムやクロアチア人の民間人を虐殺した[24]。

ユーゴスラヴィア共産党が指導するパルチザンは、当初の数年間は苦戦を強いられるものの、1943年秋以降は連合国の支持を得て優勢となり、ソ連の支援を比較的受けずにユーゴスラヴィアの解放を達成した。パルチザン闘争の参加者にはセルビア人が多かったものの、クロアチア人やスロヴェニア人などセルビア人以外の民族も多く参加していた[25]。

パルチザンもまた、戦中・戦後に捕虜の殺害などの戦争犯罪を行っていた。なかでも体制転換期にクロアチアでとくに注目を集めたのが、「ブライブルクの虐殺」と呼ばれる事件である。1945年5月、パルチザンから逃れていたクロアチア人やスロヴェニア人などの対独協力勢力がオーストリアとユーゴスラヴィアの国境の町ブライブルクでイギリス軍に投降したが、彼らは連合軍の協定に基づいてパルチザンに引き渡された。パルチザンは民間人を含む捕虜を近隣で処刑したほか、ユーゴスラヴィア各地の収容所への移送過程でも多くの捕虜を殺害した[26]。一連の事件における正確な死者数は不明であり、研究者の間で論争が続いて

21 Stanley G. Payne, “The NDH State in Comparative Perspective,” *Totalitarian Movements and Political Religions* 7, no. 4 (2006), p. 410.

22 ドイツ軍に占領されてミラン・ネディチを首班とする傀儡政権が成立したセルビアでも、強制収容所が運営されており、領内のユダヤ人や占領軍に抵抗したセルビア人が多数殺害された。しかし、セルビアではドイツ軍が強制収容所を運営しており、クロアチア独立国におけるウスタシャに比較すればセルビアにおける対独協力勢力の自律性の度合いは小さかった。Sabrina P. Ramet, “The NDH – an Introduction,” *Totalitarian Movements and Political Religions* 7, no. 4 (2006), p. 399.

23 “List of Individual Victims of Jasenovac Concentration Camp” [http://www.jusp-jasenovac.hr/Default.aspx?sid=6711]（2021年12月24日閲覧）.

24 Mario Jareb, “Allies or Foes? Mihailović’s Chetniks during the Second World War,” in Sabrina P. Ramet and Ola Listhaug, eds., *Serbia and the Serbs in World War Two* (New York: Palgrave Macmillan, 2011), pp. 155–174.

25 Marko A. Hoare, “The Partisans and the Serbs,” in Sabrina P. Ramet and Ola Listhaug, eds., *Serbia and the Serbs in World War Two* (New York: Palgrave Macmillan, 2011), p. 207.

26 捕虜の収容所への連行は「十字架の道（križni put）」とも呼ばれる。

いる。

1-2. ユーゴスラヴィアの第二次世界大戦をめぐる議論

1980 年代までのユーゴスラヴィアの公的な第二次世界大戦観の特徴として、ファシズムとパルチザンの二項対立的な構造が指摘される。第二次世界大戦中のユーゴスラヴィアでの戦いは「人民解放戦争」と呼ばれ、枢軸軍および対敵協力者に対するパルチザンの勝利は、社会主義政権の正統性の基盤ともなった。パルチザン闘争の参加者らの組織である人民解放戦争戦士組織同盟（Savez udruženja boraca Narodnooslobodilačkog rata, 以下 SUBNOR）は、公的な歴史観を支える重要な役割を果たしていた。SUBNOR への参加資格は、ユーゴスラヴィアにおける反ファシズム戦争で直接戦闘に加わった者やそれに協力した者のほか、ユーゴスラヴィア国外で反ファシズム戦争に携わった者やスペイン内戦の参加者にも与えられた [(27)]。また社会主義期には、パルチザンによる戦争犯罪への言及はタブーとされ、「ブライブルクの虐殺」についても、ユーゴスラヴィア国内では公的に語られることはなかった。

民族間の「友愛と統一」が強調された社会主義期には、第二次世界大戦における民族対立への注目は抑制されていた。ヤセノヴァツ強制収容所の跡地はウスタシャの非人道性を象徴する場であったが、それと同時に、犠牲者の多くが民族的な帰属に基づいて殺害されたという点においては社会主義期の公的な歴史観と齟齬をきたしうる場であった [(28)]。ヤセノヴァツでは、収容所の生存者らによって 1950 年代から非公式な追悼式典は行われていたものの、SUBNOR のイニシアティヴによって跡地に記念碑が建立されたのは 1966 年のことであった [(29)]。また社会主義期の芸術作品などでは、ウスタシャによるセルビア人に対する虐殺が取り上げられる場合でも、加害者の「クロアチア人」という民族的帰属が強調されることはなく、さまざまな民族が参加したパルチザンによる、ファシストや対敵協力者に対する戦いと勝利が称揚された [(30)]。

一方で、上記のような社会主義期の公的な見解に修正を加えようとする動きも存在した。パルチザンの一員として第二次世界大戦を戦い、戦後のユーゴスラヴィア人民軍で少将にもなったトゥジマンは、1961 年に労働運動史研究所の所長に就任した。しかしトゥジマンは、ヤセノヴァツ強制収容所における犠牲者数が過剰に多く推定されており、そのためにクロア

27 Darko Karačić, “Od promoviranja zajedništva do kreiranja podjela: Politike sjećanja na partizansku borbu u Bosni i Hercegovini nakon 1990. godine,” in Darko Karačić, Tamara Banjeglav and Nataša Govedarica, *Re:vizija prošlosti: Službene politike sjećanja u Bosni i Hercegovini, Hrvatskoj i Srbiji od 1990. godine* (Sarajevo: ACIPS, 2012), p. 46.

28 Heike Karge, “Mediated Remembrance: Local Practices of Remembering the Second World War in Tito’s Yugoslavia,” *European Review of History─Revue Européenne D’Histoire* 16, no. 1 (2009), pp. 54–55; Danijel Vojak, Filip Tomić, and Neven Kovačev, “Remembering the “Victims of Fascist Terror” in the Socialist Republic of Croatia, 1970–1990,” *History and Memory* 31, no.1 (2019), pp. 134–136.

29 Karge, “Mediated Remembrance,” pp. 56–57; Tea Sindbæk, *Usable History?: Representations of Yugoslavia’s Difficult Past from 1945–2002* (Aarhus: Aarhus Universitetsforlag, 2012), pp. 114–115.

30 Sindbæk, *Usable History?,* p.121.

チア人が不当に糾弾されていると主張するなど、公的な歴史観に異議を唱えたことが問題視され、1967 年にはその職を解かれた [31]。また、連邦の分権化を求める自由化・ナショナリズム運動である「クロアチアの春」が 1960 年代末から 1970 年代初頭にかけて高揚した際には、クロアチア共産主義者同盟（Savez komunista Hrvatske, 以下 SKH）の内部でも、第二次世界大戦中に当時クロアチア共産党のトップであったアンドリヤ・ヘブラングが唱えた、より緩やかな連邦構想が再評価された [32]。

「クロアチアの春」の時期には、クロアチア語の地位向上を求める知識人の署名などに代表される文化的な領域でのナショナリズムの高まりと、サヴカ・ダプチェヴィチ＝クチャルやミコ・トリパロなどの SKH の若い世代の改革派による、連邦の制度における共和国の権限拡大を求める動きが進展した。この運動は、大規模な野外集会や学生運動などを伴って盛り上がりを見せたものの、しだいに SKH の制御を超えてナショナリスト的傾向を強めた。1971 年 12 月、運動の急進化を憂慮したティトーの介入によって「クロアチアの春」は挫折し、関係者の失脚や逮捕が続いた。

ユーゴスラヴィアにおける第二次世界大戦をめぐる議論は、ティトー死後の 1980 年代に転機を迎えた。反ファシズムと多民族性を強調するこれまでの公的な歴史観とは異なり、戦争中の「民族的な犠牲」への注目が高まったのである。セルビアでは 1980 年代前半から、第二次世界大戦中のセルビア人の犠牲をテーマとして扱う文学作品や芸術作品が現れ始めた [33]。1980 年代末にはさらにセルビア・ナショナリズムが高揚し、メディアでは第二次世界大戦中のセルビア人の大量殺害について頻繁に報じられるようになった [34]。

一方で 1980 年代後半以降のクロアチアでは、第二次世界大戦中のセルビア人の犠牲が強調される傾向に対する批判が現れ始めた。1986 年にセルビアの歴史家ヴァシリイェ・クレスティチが発表した「NDH におけるセルビア民族に対するジェノサイドの起源について」という論考は、クロアチア人は第二次世界大戦以前から数世紀にわたってセルビア人ジェノサイドの意図を有していたと論じ、クロアチアで強い反発を招いた [35]。またこの時期には、第二次世界大戦中の犠牲者数についても歴史家の間で論争が勃発した [36]。

またスロヴェニアやセルビアでは、パルチザンとその敵対勢力との「国民的和解」を提唱する議論が現れていた。スロヴェニアでは、1984 年に社会学者のスポメンカ・フリバルが「罪

31 Ljiljana Radonić, “Equalizing Jesus’s, Jewish, and Croat Suffering: Post-Socialist Politics of History in Croatia,” in Oto Luthar, ed., *Of Red Dragons and Evil Spirits: Post-Communist Historiography between Democratization and New Politics of History* (Budapest: Central European University Press, 2017), pp. 39–40.

32 Jill Irvine, “The Croatian Spring and the Dissolution of Yugoslavia,” in Lenard J. Cohen and Jasna Dragović-Soso, eds., *State Collapse in South-Eastern Europe: New Perspectives on Yugoslavia’s Disintegration* (West Lafayette: Purdue University Press, 2007), p. 155.

33 Sindbæk, *Usable History?,* p. 146.

34 Bernadica Jurić, “Jasenovačke žrtve i uspostava nacionalnog programa u Srbiji (1986.–1995.),” *Radovi Zavoda za hrvatsku povijest* 49, no. 1 (2017), pp. 231–232.

35 ただしクレスティチの論考は、発表当時クロアチアのみならずセルビアでも批判された。Sindbæk, *Usable History?,* pp. 175–176.

36 Ibid. pp. 181–184.

と罪業（Krivda in greh）」というエッセイで、パルチザンが行った終戦直後の対独協力者に対する戦争犯罪を批判するとともに、第二次世界大戦中対立したスロヴェニア人どうしが相互に罪を認めて「国民的和解（narodna sprava）」に至るべきであると提唱した[37]。1990年7月8日には、終戦直後にパルチザンによってスロヴェニア郷土防衛隊[38]をはじめとする捕虜が殺害された場所であるコチェウスキ・ロクで追悼式典が開催された。式典ではリュブリャナ大司教のアロイジイ・シュスタルがミサを執り行い、スロヴェニア共和国幹部会議長であったミラン・クーチャンがスロヴェニア人どうしの「和解」を呼びかけた[39]。また1990年のセルビアでは、ヴク・ドラシュコヴィチ率いる「セルビア民族再生（Srpska narodna obnova）」をはじめとする反共産主義を掲げる野党によって、セルビア人の「国民的和解」が提唱された[40]。こうした動きは、社会主義ユーゴスラヴィアの公的な歴史観の根幹をなすパルチザンの英雄神話に挑戦すると同時に、戦時中に枢軸国へ協力した勢力の再評価に道を開くものでもあった。このような動きはクロアチアにおける「和解」の議論と同時期のものであり、後述するように、クロアチアの情勢にも影響を及ぼしていた。

以上のように、社会主義期のユーゴスラヴィアでは「多民族からなるパルチザンが、英雄的な闘争によってユーゴスラヴィアを占領者および対敵協力者から解放した」という公的な歴史観が、政権の正統性の維持と民族間関係の安定に寄与していた。一方で、1980年代後半以降のユーゴスラヴィアでは公的な歴史観が崩れ、第二次世界大戦をめぐる論争が激化していた。さらに1990年代には、政治的な変動が歴史をめぐる論争の激化を後押しすることになる。

2. 体制転換と記憶政策の変化

2-1. クロアチア複数政党制自由選挙

ソ連・東欧において政治的変革が急激に進んだ1989年以降、ユーゴスラヴィアでも民主化の動きが加速した。クロアチアでは1971年末に「クロアチアの春」が鎮圧されて以降、

37　フリバルによるこの文章は当初出版を禁じられたため、発表されたのは1986年のことであった。Gregor Kranjc, “Talking Past Each Other: Language and Post-World War II Killings in Slovenia,” *Journal of Genocide Research* 20, no. 4 (2018), p. 572; Gal Kirn, “Anti-Totalitarian Monuments in Ljubljana and Brussels: From Nationalist Reconciliation to the Open Rehabilitation of Fascism,” in Chiara De Cesari and Ayhan Kaya, eds., *European Memory in Populism: Representations of Self and Other* (London: Routledge, 2019), pp. 49–52.

38　1943年秋からドイツの支援の下で、治安維持活動やパルチザンに対する戦闘を行ったスロヴェニアの武装勢力。

39　Kranjc, “Talking Past Each Other,” p. 573; Jelena Lovrić, “Rat oko pomirenja,” *Danas*, July 17, 1990, p. 7.

40　Jelena Đureinović, *The Politics of Memory of the Second World War in Contemporary Serbia: Collaboration, Resistance and Retribution* (London: Routledge, 2019), p. 56. ただしセルビアにおいてチェトニクの再評価が国家的な政策に反映されたのは、ミロシェヴィチが失脚した後のことである。Sladjana Lazić, “The Re-evaluation of Milan Nedic and Draža Mihailovic in Serbia,” in Sabrina P. Ramet and Ola Listhaug, eds., *Serbia and the Serbs in World War Two* (New York: Palgrave Macmillan, 2011), pp. 265–266.

当局による反体制派に対する抑圧が強化されていたが、1989 年に入ると、共産主義者同盟以外の新しい政治組織の結成が進んだ。2 月には、ユーゴスラヴィア民主主義イニシアティヴ協会（Udruženje za jugoslavensku demokratsku inicijativu, 以下 UJDI）がザグレブで結成された。UJDI にはユーゴスラヴィアの各共和国から知識人が参加し、連邦制の維持を前提としたユーゴスラヴィアの民主化の要求を掲げた[41]。1989 年 5 月にはクロアチア社会自由同盟[42]（Hrvatski socijalno-liberalni savez, 以下 HSLS）、6 月には HDZ が結成された。このほか、HDZ の結成準備過程でトゥジマンと対立したヴェセリツァ兄弟らが立ち上げたクロアチア民主党（Hrvatska demokratska stranka, 以下 HDS）や、社会主義期以前に存在した同名政党の後継政党を称するクロアチア農民党（Hrvatska seljačka stranka, 以下 HSS）などが、1990 年春の選挙までに結成された。

選挙で争った主要政党のマニフェストは、いずれも民主主義や「諸民族の平等」を支持するという点では共通していた。しかしそれらの用語の理解に関しては、クロアチア人の民族的な利益に力点を置くか否かなどの点で各政党に違いがみられた[43]。本論文では、従来の社会主義体制に反対する政治勢力のうち、アメリカや西欧における価値規範や政治制度を重視し、選挙以降は HDZ の政権運営に批判的であった勢力を「リベラル」、クロアチア人の民族的な利益の擁護を重視する勢力を「ナショナリスト」と定義する。両者の路線の違いは、それぞれの政治的主張における第二次世界大戦の位置づけを左右した。

SKH は、1990 年 1 月にクロアチア共産主義者同盟・民主変革党（Savez komunista Hrvatske – Stranka demokratskih promjena, 以下 SKH–SDP）へと改称し、党の改革をアピールした。また 1990 年 2 月には、セルビア人の民族政党であるセルビア民主党（Srpska demokratska stranka, 以下 SDS）が結成された。SDS の初代党首となった精神科医のヨヴァン・ラシュコヴィチは、ユーゴスラヴィア連邦の維持を前提として、クロアチアのセルビア人が広範な文化的自治および領土的自治を獲得することを目標としていた[44]。

自由選挙を控えた 1990 年 3 月には、HSLS をはじめとした中道・リベラル小政党を中心とする選挙連合の国民合意連合（Koalicija narodnog sporazuma, 以下 KNS）が結成された。KNS の結成には政党のほか、ダプチェヴィチ＝クチャルやトリパロなどの 5 人が、政党に所属しない個人として参加した。

1990 年の 4 月末から 5 月初めにかけて行われたクロアチアの議会選挙では、HDZ が 205 議席で大勝し、SKH–SDP が 73 議席で第 2 党につけた。一方で、リベラルな志向の強い KNS は 11 議席と大敗し、SDS はクロアチアのセルビア人の多くが SKH–SDP を支持した

41 ただし UJDI は政党として政界に参入する意図を持っておらず、1990 年春に行われたクロアチアの自由複数政党制選挙には候補者を擁立しなかった。Mila Orlić, “Od postkomunizma do post-jugoslavenstva. Udruženje za jugoslavensku demokratsku inicijativu,” *Politička misao* 48, no. 4 (2011), pp. 102–103.

42 のちに「クロアチア社会自由党 (Hrvatska socijalno-liberalna stranka)」へと改称したが、略称は HSLS のままである。

43 Đurić, Munjin, and Španović, eds., *Stranke*.

44 1991 年の国勢調査によれば、クロアチアで自らをセルビア人であると申告する人の割合は約 12.2 % であった。Državni zavod za statistiku, “Stanovništvo prema narodnosti, popisi 1971. – 2011.”[https://www.dzs.hr/Hrv/censuses/census2011/results/htm/usp_03_HR.htm]（2021 年 12 月 24 日閲覧）.

ことから 5 議席にとどまった。5 月 30 日に開会された議会では、HDZ 党首のトゥジマンがクロアチア社会主義共和国幹部会議長（のちに大統領）に選出された。

SDS は選挙後さらにクロアチア政府との対立姿勢を強め、選挙時には SKH–SDP へ投票する傾向が強かったクロアチアのセルビア人の間で支持を拡大した。地方議会の SKH–SDP のセルビア人議員のなかには、同党がセルビア人の利害の擁護に対して消極的な姿勢をとったことに失望して SDS へ移籍する者もみられた[45]。1990 年秋以降、ラシュコヴィチに代わって SDS 党内の実権を握ったミラン・バビッチはセルビア人多数派地域の領土的自治を強硬に主張し、さらにはクロアチアからの分離への動きを推し進めた。クロアチアにおける政府側とセルビア人側の流血を伴う衝突は 1991 年春ごろから頻発していたが、1991 年 6 月 25 日にクロアチア共和国がユーゴスラヴィア連邦からの独立を宣言したのち、ユーゴスラヴィア人民軍の本格的な介入によって大規模な紛争へと発展することになる。

2-2. クロアチアの諸政党と「ヨーロッパへの回帰」

SDS を除くクロアチアの主要政党にとって、クロアチアがユーゴスラヴィア連邦と距離を置き、西欧と緊密な関係を結び、その一員となることは共通して重大な関心事のひとつであった。1989 年から 1990 年にかけて各政党が作成したマニフェストでは、西欧との協力や、EC への加盟を含む制度的なヨーロッパ統合が目標とされていた。

しかし、クロアチアの各政党がめざす「ヨーロッパへの回帰」の方向性はそれぞれに異なっていた。山川卓の整理によれば、体制転換期のクロアチアにおいて「民主制とは『ヨーロッパの伝統』と同義で語られるものであった」[46]。HDZ は「まず独自の文化を持ったネイション集団にもとづく政治体制の形成」を目標とする一方で、KNS は「法の支配や市場経済、思想の自由などの諸制度及び価値規範」の確立をめざしていた[47]。しかしさらに正確を期するならば、山川の整理は KNS のなかでも左派的な勢力およびリベラルな勢力によりあてはまるというべきであろう。選挙の第 1 回投票後に KNS を離脱した HDS は、同連合内の最大政党であった。だが同党のマニフェストは、同じく KNS の主要な構成政党である HSLS と比較すると明らかに右派的であり、クロアチア民族が中核となる国民国家の建設を最優先するものであった[48]。この点において HDS の政治的な方向性は、むしろ HDZ に近いといえる。

KNS 内の左派・リベラル勢力は、クロアチアの主権の確立を支持していた一方で、そのためには民主主義の確立など、西欧に共通する規範に沿うための政治的変革が必要であると主張していた。「クロアチアの春」後の失脚を経て、KNS のリベラルな陣営を代表する人物として 1990 年に政治活動の表舞台に復活したトリパロはその一人である。トリパロは、クロアチアの独立に対する西欧諸国の理解を得るためには、クロアチアがヨーロッパの基準に

45 Kubo Keiichi, “The Radicalisation and Ethnicization of Elections: The 1990 Local Elections and the Ethnic Conflict in Croatia,” *Ethnopolitics* 6, no. 1 (2007), p. 34.

46 山川卓『マイノリティ保護のクロアチア政治史：ネイション化とヨーロッパ化の弁証法』晃洋書房、2019 年、87 頁。

47 同上、87 頁。

48 Đurić, Munjin, and Španović, eds., *Stranke*, pp. 150–153.

沿って民主主義を確立する必要があると論じた[49]。

「ヨーロッパへの回帰」というヨーロッパ中心主義的な理念のもと、スロヴェニアやクロアチアでは、セルビアなどのユーゴスラヴィア南部の地域が「非ヨーロッパ的な他者」に位置づけられた[50]。トゥジマンは、東西ローマの境界および正教会とローマ・カトリック教会を隔てる境界を「ユーゴスラヴィアを分断する境界線」と呼び、「クロアチア人は西欧の一部、地中海の伝統の一部です。［……］セルビア人は東に属しています。彼らの教会は東に属しています。彼らはキリル文字を使いますが、それは東のものです。彼らはトルコ人やアルバニア人と同様、東の民族なのです」と述べた[51]。このような文明論的な二項対立のレトリックは、クロアチアやスロヴェニアの知識人や政治家のほか、西側のマスメディアでもみられた[52]。

ただし、クロアチアにおいて「ヨーロッパへの回帰」の志向が必ずしも文明論的な世界観にのみ結びついていたわけではなかった。トリパロは、ユーゴスラヴィア解体の危機に際してヨーロッパはユーゴスラヴィア全体との交渉を望んでいると指摘し、「セルビアとモンテネグロにおける現実社会主義の強い残滓、コソヴォにおけるアルバニア人の人権および民族的な権利の侵害は、私たちのヨーロッパへの包摂の中核的な障害をなす」[53] とセルビアの姿勢を批判した。

「クロアチアの春」の際に学生運動のリーダーとして活躍し、1990 年から 1991 年まで HSS の党首を務めたイヴァン・ズヴォニミル・チチャク[54] は、クロアチアの週刊誌『ダナス』の 1991 年 7 月 2 日号に掲載された記事で、独立宣言直後のスロヴェニアに対するユーゴスラヴィア人民軍の攻撃や、当時セルビアの党指導部で実権を握っていたスロボダン・ミロシェヴィチらによる「メディアの憎悪キャンペーン」を批判した。一方でチチャクは、「ヨーロッパが平和のためのパートナーを求めている」ことについて「これはまさにスロヴェニアにもクロアチアにもチャンスだが、しかしセルビアにも、もしミロシェヴィチとヨヴィチ[55] のようなタイプを捨てることができれば、チャンスなのだ」と論じた[56]。ここでは「セルビア」

49 Agan Begić, “Oprezno s razdruživanjem,” *Danas*, July 2, 1991, p. 23.

50 Milica Bakić-Hayden and Robert M. Hayden, “Orientalist Variations on the Theme “Balkans”: Symbolic Geography in Recent Yugoslav Cultural Politics,” *Slavic Review* 51, no. 1 (1992), pp. 4–5.

51 Milton Viorst, “The Yugoslav Idea,” *The New Yorker*, March 18, 1991, p. 74.

52 Bakić-Hayden and Hayden, “Orientalist Variations,” pp. 10–11.

53 Miko Tripalo, “Kamo ide Jugoslavija,” *Danas,* February 19, 1991, p. 17.

54 ただし、HSS は選挙前にチチャクを支持する派閥と支持しない派閥に分裂していた。チチャクの派閥は、1990 年の選挙では HDZ を中心とする右派政党の選挙連合クロアチア・ブロック（Hrvatski blok）に参加したが、選挙後にはトゥジマンからの連立政権の提案を拒んだ。選挙後のチチャクはトゥジマンの政策に対して批判的な姿勢をとり続けた。Domagoj Knežević, *Hrvatska demokratska zajednica od osnivanja do raskida s Jugoslavijom* (Zagreb: Hrvatski institut za povijest, 2020), p. 194; “Ivan Zvonimir Čičak” [http://www.hho.hr/clanovi/predsjednik/93-2/]（2021 年 12 月 24 日閲覧）.

55 1991 年 5 月までユーゴスラヴィア連邦幹部会議長を務めていたセルビアの政治家ボリサヴ・ヨヴィチを指す。

56 Ivan Zvonimir Čičak, “Dobar dan tugo,” *Danas*, July 2, 1991, p. 21.

という国家あるいはセルビア人という民族そのものではなく、「ミロシェヴィチとヨヴィチ」に代表されるセルビアの政治体制が非ヨーロッパ的な「他者」に位置づけられていた。

トリパロやチチャクは、セルビアを「ヨーロッパ的ではない」と位置づける点においてはトゥジマンなどのナショナリストと一致していた。両者の違いは、その位置づけの根拠を本質主義的な要素に求めるか否かという点にあった。とはいえ実際には、セルビアおよびクロアチアのセルビア人がとった政治的な方針や要求の実現のための手段は、クロアチアのリベラルの議論においてもしばしば批判の対象となった。クロアチアにおいて「ヨーロッパへの回帰」の論理には、歴史的および文化的な西欧への帰属意識を重視するものと、西欧の価値規範を受容することでヨーロッパの構成員となりうると考えるものとが存在した。しかし結果的には両者とも、ヨーロッパ中心主義的な思想に基づく、セルビアおよびクロアチアのセルビア人勢力に対する批判につながったといえる。

一方で、クロアチアのセルビア人もまた、クロアチア政府のセルビア人に対する政策や第二次世界大戦中のセルビア人虐殺に対するクロアチア人政治家の態度を、他のヨーロッパ諸国の状況と比較して批判した。ラシュコヴィチは、1990 年 12 月にセルビアの週刊誌『ニン』に掲載された記事で、「今日のヨーロッパでは、そしておそらく世界にも、このようなタイプの威嚇と迫害は存在しない」、「クロアチアでは、ヨーロッパの地では知られていない新しい専制が打ち建てられた。NDH が再び覚醒し、復活したように見える」などと述べ、「それゆえにクロアチアのセルビア民族は、自身の権利、自由、民主主義のために戦っているのだ」と主張した [(57)]。またラシュコヴィチは、クロアチア人政治家はセルビア人に対して西ドイツのヴィリー・ブラントが行ったような謝罪を行わないであろうとも述べていた [(58)]。

2-3. 第二次世界大戦の歴史をめぐる主要な争点

体制転換期のクロアチアにおいて、第二次世界大戦の歴史をめぐる論争は歴史家の間にとどまらず、政治家の主張や公共の議論に広がった。本節では、それらの論争で争点となった 3 つの側面に着目する。

第 1 に、クロアチア独立国の評価である。中世に存在したクロアチア王国以来、ハンガリー王国やハプスブルク君主国の支配下にあってもクロアチアの「国家性（državnost）」が連綿と法的に継承されてきたという思想は、クロアチアのナショナリズムにおいて中核的な理念であった。それゆえに、「クロアチア独立国」を、クロアチア人の独立国家の樹立という「中世以来のクロアチア民族の願望」が実現されたものとみなすか否かは、体制転換期のクロアチアにおいても大きな問題となった [(59)]。

---

57 Јован Рашковић, “ Шта „ Данас “ не сме да об јави ,” *НИН*, December 28, 1990, p. 29. 『ニン』の記事によれば、この記事の原稿は当初クロアチアの週刊誌『ダナス』のために執筆されたが、『ダナス』編集部は掲載を拒否した。

58 Јован Рашковић, *Душа и слобода* (Нови Сад : Славија, 1995), p. 211.

59 Vjeran Pavlaković and Davor Pauković, “Framing the Nation: An Introduction to Commemorative Culture in Croatia,” in Vjeran Pavlaković and Davor Pauković, eds., *Framing the Nation and Collective Identities: Political Rituals and Cultural Memory of the Twentieth-Century Traumas in Croatia* (London: Routledge, 2019), p. 4.

体制転換期のクロアチアの政治空間では、一部の極右勢力以外は基本的にウスタシャを非難する姿勢をとっており、「反ファシズム」は依然としてクロアチアで共有された規範であった。1989 年 2 月に作成された HDZ の綱領草案は、第二次世界大戦中にユーゴスラヴィア各地から代表を集めて開かれたユーゴスラヴィア人民解放反ファシスト会議（Antifašističko vijeće narodnog oslobođenja Jugoslavije, 以下 AVNOJ）および 1943 年にクロアチアの反ファシズム運動を指導する機関として結成されたクロアチア人民解放反ファシスト全国評議会（Zemaljsko antifašističko vijeće narodnog oslobođenja Hrvatske, 以下 ZAVNOH）の決定によってクロアチアが建設されたことを、「ポジティヴな伝統」のひとつとして言及していた [60]。1990 年 12 月に制定されたクロアチア憲法においても、クロアチアの主権の基盤はクロアチア独立国の独立宣言にあるのではなく、ZAVNOH の決定を継承していると明記された [61]。

一方でトゥジマンは、ウスタシャによる大量殺害を相対化しているとしてしばしば批判されていた。彼は、ヤセノヴァツ強制収容所内でユダヤ人被収容者がセルビア人被収容者の殺害に関与していたなどとする証言を自著『歴史的真実の荒野』で史料として引用し、収容所運営へのユダヤ人の関与を論じていた [62]。トゥジマンはこのことについて、国内外のユダヤ人団体から反ユダヤ主義的であると抗議を受けた [63]。また 1990 年 2 月に HDZ 党大会で行った演説では、トゥジマンは「NDH は単なる『売国奴』的産物や『ファシストの犯罪』ではなく、むしろクロアチア民族の自身の自立した国家への歴史的な夢や、［……］国際的な要因の理解の表れだったことを［HDZ への批判者は］忘れている」[64] と述べ、クロアチア内外で非難された [65]。その一方でトゥジマンは、第二次世界大戦中のクロアチアにおける反ファシズム運動もまたクロアチア民族解放のための運動であったと評価した [66]。このような解釈は、ウスタシャとクロアチアにおける反ファシズム運動の双方を、クロアチア民族解放のために戦っていたという点で共通しているとみなすものであった [67]。

60 Đurić, Munjin, and Španović, eds., *Stranke*, p. 60.

61 Ustav Republike Hrvatske. (NN 56/1990)

62 Franjo Tuđman, *Bespuća povijesne zbiljnosti: Rasprava o povijesti i filozofiji zlosilja* (Zagreb: Nakladni zavod Matice hrvatske, 1989), pp. 317–320.

63 Željko Krušelj, “Otvaranje starih rana,” *Danas*, April 3, 1990, p. 29; Ivo Goldstein and Slavko Goldstein, “Revisionism in Croatia: The Case of Franjo Tudman,” *East European Jewish Affairs* 32, no.1 (2002), p. 62.　トゥジマンが引用した証言の信憑性の薄さについては、Goldstein and Goldstein, “Revisionism in Croatia,” pp. 58–60, を参照。

64 Đurić, Munjin, and Španović, eds., *Stranke*, p. 75.

65 *Borba*, February 27, 1990, p. 6; *Borba*, March 1, 1990, p. 6. また、セルビアの週刊誌『ニン』は 1990 年 10 月 5 日号で「HDZ と NDH」と題する特集を組んだが、その記事中でもトゥジマンのこの発言が批判の対象となった。Милорад Вучелић, “ Поново Усташе ,” *НИН*, October 5, 1990, p. 8. ただしトゥジマンはこの演説で、AVNOJ と ZAVNOH がクロアチア民族の解放のために果たした歴史的意義についても言及していた。Đurić, Munjin, and Španović, eds., *Stranke*, p. 77.

66 Franjo Tuđman, “Hrvatska povijest je moja povijest,” in Milovan Baletić ed., *Ljudi iz 1971: Prekinuta šutnja* (Zagreb: Vjesnik, 1990), pp. 191–193.

67 Renate Reinhardt, “„Bund souveräner Republiken“,”*Die Tageszeitung*, July 28, 1990, p. 10 [https://taz.de/Bund-souveraener-Republiken/!1758071/] (2021 年 12 月 24 日閲覧); Đurašković, “National Identity-Building,” p. 776.

第 2 に、クロアチア人の「加害者」としての側面である。クロアチア人の民族性と第二次世界大戦中のウスタシャによる大量殺害を本質主義的に結びつける議論は、1990 年代に入ってもなおクロアチアでは頻繁に批判の対象として言及された [68]。またすでに述べたように、1980 年代以降、第二次世界大戦中のユーゴスラヴィアにおける死者数が政治的な論争の的となった。なかでも、ヤセノヴァツ強制収容所での死者数はとりわけ重要な争点であった。社会主義期の公的な見解ではヤセノヴァツでの死者数は 50 万人から 70 万人とされてきた。この見解は過剰な見積もりであったが、1980 年代のセルビアではさらに死者数が誇張され、ヤセノヴァツ強制収容所だけで 100 万人以上のセルビア人が犠牲になったと述べる研究者も現れていた [69]。一方クロアチアでは、死者数の誇張はクロアチア人に対する糾弾を目的とした「ヤセノヴァツの神話」[70] であるとして批判された。トゥジマンは自著で、ヤセノヴァツは「労働収容所」であったと主張し、収容所での死者は「3–4 万人程度」であったと推定した [71]。

第 3 に、クロアチア人の「犠牲者」としての側面である。1945 年 5 月の「ブライブルクの虐殺」についての議論は社会主義期のユーゴスラヴィアではタブーであったが、ユーゴスラヴィア国外のクロアチア系移民の間では、ブライブルクでの非公式な追悼式典や事件に関する書籍の出版が行われていた [72]。体制転換期以降はクロアチア共和国内でも、ブライブルクをはじめとした、パルチザンによるクロアチア人勢力に対する戦争犯罪について公に語られるようになった。このような議論は、「クロアチア民族の犠牲」を強調して、セルビアにおける「セルビア民族の犠牲」を強調する言説に対抗するとともに、英雄的なパルチザンによる人民解放戦争を基盤としてきた社会主義ユーゴスラヴィアの正統性を深刻に揺るがすものでもあった。

以上のように第二次世界大戦の歴史をめぐる論争がクロアチアを席巻するなか、1989 ― 90 年に成立した各政党は、クロアチア史をそれぞれ自党の正統性や政治的立場の主張に利用していた [73]。SKH–SDP は、選挙綱領で古い政治体制からの断絶をアピールする一方で、党のこれまでの歩みについては「反ファシズム、反スターリニズム、連邦主義、民族的平等、私たちをほかの社会主義体制から区別していた民主的で自由主義的な要素」を政治的遺産と

68　一例として、1990 年 2 月の HDZ 党大会におけるトゥジマンの演説を参照。Đurić, Munjin, and Španović, eds., *Stranke*, p. 73.

69　Vjeran Pavlaković, “Komemorativna kultura Bleiburga, 1990–2009.,” in Slejman Bosto and Tihomir Cipek, eds., *Kultura sjećanja: 1945.: Povijesni lomovi i svladavanje prošlosti* (Zagreb: Disput, 2009), p. 177; Sindbæk, *Usable History?*, pp. 45, 166–167.

70　Tuđman, *Bespuća*, p. 12.

71　Ibid., p. 316.

72　Pål Kolstø, “Bleiburg: The Creation of a National Martyrology,” *Europe-Asia Studies* 62, no. 7 (2010), pp. 1157–1159; Nikolina Židek, “Homeland Celebrations Far Away from Home: The Case of the Croatian Diaspora in Argentina,” in Vjeran Pavlaković and Davor Pauković, eds., *Framing the Nation and Collective Identities: Political Rituals and Cultural Memory of the Twentieth-Century Traumas in Croatia* (London: Routledge, 2019), pp. 213–215.

73　Stjepan Matković, “Povijesne teme u programima hrvatskih političkih stranaka: 1989.–1990.,” in Tihomir Cipek ed., *Kultura sjećanja: 1991.: Povijesni lomovi i svladavanje prošlosti* (Zagreb: Disput, 2011), pp. 109–121.

して受け継ぐと表明した[74]。

HDZの綱領草案は、19世紀後半に権利党を創設してクロアチア民族の独立国家建設を主張したアンテ・スタルチェヴィチや、戦間期にクロアチア農民党を率いたスティエパン・ラディチ、クロアチアの共産主義者など、クロアチアの近現代史上の相異なる方向性を持つ政治家たちのイデオロギーの「ポジティヴな伝統」を継承していると主張した[75]。またすでに述べたように、1990年2月のHDZ党大会でのトゥジマンのクロアチア独立国に関する発言は、クロアチア内外で批判を呼んでいた。

一方で、HSLSは過去をめぐる論争の政治化自体を批判していた。HSLSは、自党の政策をとりまとめた「自由のプログラム」において、「それらの［クロアチアとユーゴスラヴィアの現代史における論争的な］テーマについての素人議論が新しい論争を煽り、民族的な、またイデオロギー的な対立と不寛容を深めている。それらは現在についての合意を困難にしている」と指摘し、HSLSは「過去の評価を歴史家たちに任せる必要があると考えている、なぜならそれは彼らの仕事だからである。私たちの仕事は未来に向き合うことである」と表明した[76]。しかし後述するように、HSLSもクロアチア史をめぐる政治的な論争にかかわっており、また党の結成に中心的な役割を果たした人物の間でも、第二次世界大戦の歴史にどのように向き合うべきかという問題をめぐって対立が存在した。

2-4. クロアチアにおける記憶政策

体制転換期には、記念碑の建立・撤去や記念日の制定などの記憶政策の領域で、第二次世界大戦期の事件のみならず、クロアチアの歴史をクロアチア人の民族意識の高揚に利用しようとする動きが広がった。その一方で、それらの政策に関する意見の対立もしばしばみられた。本節では、公共空間におけるクロアチア史の記念を目的とする政策に注目して、体制転換期におけるクロアチア・ナショナリズムの広がりと、第二次世界大戦をめぐる争点の表出を示す。

体制転換期のクロアチアにおいて、公的な空間における歴史の表象は、第二次世界大戦のものに限らず政治的な論争の焦点となった。その一端は、19世紀半ばのクロアチア総督イェラチッチの像を首都ザグレブに復活させることを求める運動にも表れている。イェラチッチ像はハプスブルク君主国時代の1866年にザグレブ中心部の広場に設置されたが、第二次世界大戦後の1947年に撤去されていた。1989年の秋、HDZとHSLSがイェラチッチ像の復活を求めてそれぞれ活動を展開したものの、両者の活動には体制との距離や像の象徴的な位置づけをめぐって摩擦が存在した[77]。その後イェラチッチ像は1990年10月16日に復活

74 Đurić, Munjin, and Španović, eds., *Stranke*, p. 273.

75 Ibid., p. 60.

76 Ibid., p. 217.

77 イェラチッチ像復活運動におけるHDZとHSLSの方針の違いや対立については、以下を参照。Knežević, *Hrvatska demokratska zajednica*, p. 145; Ivo Goldstein, “Upotreba povijesti: Hrvatska historiografija i politika,” in Slavko Goldstein and Ivo Goldstein, *Jasenovac i Bleiburg nisu isto* (Zagreb: Novi liber, 2011), pp. 297–298. 前者のドマゴイ・クネジェヴィチはHDZ関係者の史料を中心に利用している。後者のイヴォ・ゴールドシュタインはHSLSの創設者スラヴコ・ゴールドシュタインの息子であり、自らも歴史家としてクロアチアの歴史修正主義に批判的な論考を多

し、記念式典やイベントが盛大に行われたが、この際にも両党の摩擦は鮮明であった。式典に出席したHSLS党首のドラジェン・ブディシャは、像の復活を促した前年の署名運動という自党の功績をアピールするとともに、「像の撤去という野蛮な行為は、新旧のユーゴスラヴィアにおけるクロアチア民族の歴史的な運命を象徴的に表現して」おり、像の復活によってクロアチア民族は「象徴的に自らを取り戻した」と述べた[78]。一方トゥジマン大統領は記念式典の演説で、HSLSがイェラチッチ像の復活における貢献を誇示していることを批判した[79]。

またHDZが政権を獲得したのち、クロアチアでは各地で共産主義・社会主義色の強い名称を持つ通りや広場の改称が進められた。しかし、このような改称はクロアチア人内部の意見の対立を浮き彫りにした。たとえば、1990年9月にザグレブ市議会が通りや広場の改称を決定した[80]際には、SUBNORが強い反対を表明した。ザグレブのSUBNORは、市議会の決定に先んじて、「ファシズムの犠牲者広場（Trg žrtava fašizma）」や「ティトー元帥広場（Trg Maršala Tita）」のほか「人民英雄やJNAの部隊」の名前を持つ通りの改称に反対すると市長らに伝えていた[81]。スプリトのSUBNORのメンバーもまた、ザグレブの「ファシズムの犠牲者広場」の改称は「人民解放戦争とZAVNOHの諸決定の抹消」を意味すると批判した[82]。

一連の改称のなかでとりわけ社会的な波紋を呼んだのは、ザグレブの「ファシズムの犠牲者広場」の改称決定であった。この広場は9月に「クロアチアの統治者広場（Trg hrvatskih vladara）」へ、12月には「クロアチアの偉人広場（Trg hrvatskih velikana）」へと変更されるという決定が下された[83]。ザグレブの通りや広場の改称について、1990年10月にクロアチアの週刊誌『ダナス』に掲載されたザグレブ市民へのアンケートでは、他の通りや広場の改称に対しては、賛成意見が6割から9割を占めたにもかかわらず、「ファシズムの犠牲者広場」の改称に対しては賛成が43%にとどまり、反対意見が過半数を占めていた[84]。後述するように、「ファシズムの犠牲者広場」の改称に関しては、改称後も反対運動が1990年代を通して根強く継続することになる。

1990年5月には、これまでユーゴスラヴィア国外のクロアチア人によって小規模に行われてきたブライブルクの犠牲者を追悼する式典が、クロアチアからの参加者を含めて大規模に行われた。この式典では、フランシスコ会士でHDZ党員でもあるトミスラヴ・ドゥカに

く発表している。

78 *Slobodna Dalmacija*, October 17, 1990, p. 5.

79 Ibid., p. 3.

80 *Službeni glasnik grada Zagreba* 30/1990, pp. 1387–1390. 当時のザグレブ市長ボリス・ブザンチッチはHDZに所属していた。

81 *Borba*, September 21, 1990, p. 5.

82 *Slobodna Dalmacija,* October 3, 1990, p. 11.

83 *Službeni glasnik grada Zagreba* 39/1990, p. 1832.

84 Dejan Jović, “Trg povratka opozicije,” *Danas*, October 9, 1990, p. 68. また1991年6月14日から16日にかけて日刊紙『ヴィエスニク』の水曜版が行った世論調査では、「『ファシズムの犠牲者広場』の名称を変更する必要があったと思いますか」という質問に対して、肯定が45%、否定が45.8%という結果になり、否定票が肯定票をわずかに上回った。 *Vjesnik u Srijedu*, June 19, 1991, p. 1.

よるミサが行われ、クロアチア人の犠牲が強調された。式典に参加したものの途中退席したブディシャは「私たちは追悼式典を去りました。なぜなら、それは私たちが示したいと思っていた死者への敬意の威厳ある表現ではなかったからです」[85]と式典の政治的な性格を批判したうえで、彼が党首を務めるHSLSはヤセノヴァツへも行く予定であると述べた。一方で、HDZから式典に派遣された代表でもあったドゥカは、スピーチで「この場所は団結の場所です、なぜならこれらすべてのクロアチアの殉教者たちは、私たちが望んでいたもの、私たちが愛していたもののために亡くなったからです」と述べた[86]。

このほかにも、社会主義期には顧みられてこなかった犠牲者に対する調査や追悼も行われるようになった。その代表的な例が、1943年から終戦直後にかけて、パルチザンが殺害したクロアチア独立国兵士らの遺体が投棄された集団埋葬地であるヤゾヴカの発掘である。この集団埋葬地の存在は以前から地元住民や洞窟探検家には知られていた[87]ものの、社会主義期にはヤゾヴカについて公の場で語ることはできなかった。1990年6月下旬にジャーナリストや研究者らによってヤゾヴカから遺骨が発見されると[88]、このニュースはすぐに大きな話題となった。7月上旬には、ヤゾヴカで発見された犠牲者を追悼する式典やミサが3回にわたって行われた[89]。

ヤゾヴカの発見に対しては、「多元的で民主的なクロアチアが自身の一面的な真実と集団的トラウマからついに自由になる方法」であると肯定的に評価する声[90]の一方で、ヤゾヴカの発掘がヤセノヴァツにおける虐殺の矮小化や相対化に用いられることへの懸念の声も存在した[91]。またクロアチアのSUBNORは、ヤゾヴカの発掘に対して、まずウスタシャによる殺害の犠牲者の遺体が投棄されたヤドヴノ強制収容所跡地を発掘するべきであると述べ、しかる後に「相互のコンテクストと関係性にそれらを位置づける」べきであると主張した[92]。

体制転換期には、社会主義期から行われていた記念式典の意味も変化した。ダルマチアのスプリトに近いガタ村では、1942年10月に起きたチェトニクによる虐殺の犠牲者を追悼する式典が社会主義期から開催されていた。地元紙『スロボドナ・ダルマチア』の1980年代後半の報道によれば、この追悼集会では例年「死んだ兵士たちとファシストのテロルの犠牲者たち」に追悼が捧げられていた[93]。しかし1990年に行われた式典では、ミサが行われるとともに、セルビア人であるチェトニクに殺害された「クロアチア民族」としての犠牲者の属性が強調された[94]。このような集会の性格の変化に対して、スプリトのSUBNORでは、ガタの追悼集会が「反セルビア人的」なものに変化したと批判された[95]。

85 Branko Tuđen, “Daleko do smiraja,” *Danas*, May 22, 1990, p. 21.
86 Ibid.
87 *Slobodna Dalmacija*, July 1, 1990, p. 13.
88 Želimir Žanko and Nikola Šolić, eds., *Jazovka* (Zagreb: Vjesnik, 1990), pp. 18–19.
89 Pauković, “Framing the Narrative,” p. 110.
90 *Slobodna Dalmacija*, July 1, 1990, p. 13.
91 *Slobodna Dalmacija*, July 9, 1990, p. 7.
92 Ibid., p. 2.
93 *Slobodna Dalmacija*, October 5, 1987, p. 5; *Slobodna Dalmacija*, October 3, 1988, p. 2.
94 *Slobodna Dalmacija*, October 1, 1990, p. 5.
95 *Slobodna Dalmacija*, October 3, 1990, p. 11.

以上のように、1989 年以降のクロアチアでは、第二次世界大戦をはじめとした歴史上のできごとを記念する諸政策が、社会主義体制の正統性を支えるものから、クロアチア・ナショナリズムを強化するものへと変化していた。しかし、「反ファシズム」の理念の変容や、ウスタシャに対する追悼に対しては反発がみられた。こうした分断は、この時期のクロアチアにおける「和解」の提言にも影響することとなる。

3. 和解と「ヨーロッパへの回帰」という目標

体制転換を通じて、クロアチアにおける第二次世界大戦の過去とどのように向き合うべきかという議論にも大きな変化が表れた。本節では、この時期のクロアチアに現れたさまざまな和解への呼びかけを、社会主義期の公的な歴史観を含めて 3 つのパターンに整理して提示する。また、第二次世界大戦への見方がクロアチアの「ヨーロッパへの回帰」という目標とどのように結びつけられていたかを検討する。

本節では、各政党を中心とする政治家に加えて、社会主義期の第二次世界大戦をめぐる記憶政策で重要な役割を果たしていた退役兵団体 SUBNOR にも注目する。「和解」のあり方をめぐる議論は、SUBNOR の分裂と軌を一にしていた。すなわち、SUBNOR が支えてきた社会主義期の公的な第二次世界大戦観を墨守する勢力と、それに反発して新たな退役兵団体を結成し、クロアチア人どうしのイデオロギー的分断の解消を重視する勢力、さらにその両者を仲裁しようとし、より包括的な第三の道を提唱する勢力が、3 種類の「和解」の提言とパラレルな主張を展開していた。

3-1. 社会主義期の理念に基づく民族間の分断の克服

HDZ が政権を獲得した後も、クロアチアでは社会主義期の公的な歴史観を堅持し、民族的な分断の克服の呼びかけを行った勢力が存在した。その代表例が SUBNOR である。クロアチア共和国の SUBNOR は、「クロアチア民族とセルビア民族の友愛」を「人民解放戦争の基礎的な遺産」とみなし、SDS によるセルビア人自治へ向けた動きや HDZ などのナショナリスト政党を批判した [96]。

一方で、SUBNOR の構成員は一枚岩だったわけではなく、組織の分裂も起きた。1990 年 11 月 9 日には、SUBNOR から分離する形でクロアチア退役兵協会（Udruženje hrvatskih ratnih veterana, 以下 UHRV）が結成された。新組織設立のためのイニシアティヴグループの記者会見では、SUBNOR と分離して新組織を結成する理由として、SUBNOR が「すでに何年もの間クロアチアの兵士の大部分を代表しておらず、また完全に反クロアチア的な活動を行っている」ことや、クロアチアの SUBNOR の指導部のポストが長年にわたり「3 分の 1 がセルビア人、3 分の 1 がクロアチア人、3 分の 1 がその他の少数民族」に割り当てられてきたことへの不満が述べられた [97]。UHRV に参加する資格は、「人民解放戦争のすべての参加者および支援者、ファシストおよび占領者のテロルの犠牲者、民間人および戦闘員の

96　*Borba*, August 14, 1990, p. 1.
97　*Slobodna Dalmacija*, August 17, 1990, p. 2.

戦争犠牲者」のほか、「宗教、世界観あるいは民族的な帰属によらず、主権と民主的なクロアチア国家のために戦った人びとすべて」に与えられるとされた[98]。トゥジマンは UHRV 結成に対して支持を表明し[99]、UHRV 結成の同日には SUBNOR に対する共和国予算からの支出の停止が決定された[100]。

SUBNOR による呼びかけはその後も継続した。ダルマチアの SUBNOR の調整委員会（Koordinacioni odbor）は 1991 年 2 月、HDZ の党員らの発言にしばしば表れる「ファシズムの犠牲者と、いわゆる共産主義の犠牲者の同一視」を批判し、「ユーゴスラヴィアのすべての地域における、ネオファシズムとも呼びうる、ナショナリズムの伸長する潮流」を警告する公開書簡を『スロボドナ・ダルマチア』紙に発表した[101]。この公開書簡は、「（戦争犯罪者を除き）いかなる形であれ占領者の側で戦争に参加したすべての人びととの和解と共生には賛成だが、反ファシズムの戦士の参加者とファシストの戦争舞台の参加者とのいかなる形の同等視にも反対である」と述べるとともに、UHRV の結成や SUBNOR に対する共和国予算の停止を批判した。また、「解放・反ファシスト戦争のダルマチアの戦士たちは、クロアチア人の戦士はセルビア人の戦士と違いはなく、ユダヤ人の戦士はムスリム人の戦士と、モンテネグロ人はマケドニア人と、マジャール人はスロヴァキア人と、フランス人はドイツ人と、イタリア人はポーランド人と、などと違いはなかったが、しかし反ファシストはファシストとはっきり違っていた」と述べて、民族の違いではなく反ファシストかファシストかの区別こそが重要であると強調した。

しかしこの公開書簡に対して、同紙にはダルマチア各地から「クロアチア共和国の破壊の呼びかけ」[102] であり、「党［HDZ］だけでなく、有権者、すなわちクロアチア民族をも侮辱している」[103] という批判が寄せられたほか、「SUBNOR はクロアチア民族の和解に反対しているため、クロアチア国家の最大の敵である」[104] と非難する者もいた。

以上のように、SUBNOR の主張に代表される社会主義期の正統的な歴史観は、1990 年代初頭のクロアチアにおいては社会的影響力を喪失していった。一方で、これを乗り越えようとする勢力が提案する「和解」には 2 通りのパターンを見出すことができる。第 1 のパターンは HDZ 党首かつクロアチア大統領であったトゥジマンが提唱していた「国民的和解」であり、第 2 のパターンは「市民的和解」と呼ぶべきものであった。

3-2.「国民的和解」

トゥジマンの提唱する「国民的和解」は、クロアチアのパルチザンとウスタシャをどちらもクロアチア民族解放のために戦っていた勢力であるとみなすことでクロアチア人内部の対

98 *Slobodna Dalmacija*, September 22, 1990, p. 3.
99 *Borba*, November 10–11, 1990, p. 15.
100 Zakon o prestanku važenja Zakona o financiranju Saveza udruženja boraca narodnooslobodilačkog rata Hrvatske. (NN 47/1990)
101 *Slobodna Dalmacija*, February 6, 1991, p. 25.
102 *Slobodna Dalmacija*, February 13, 1991, p. 25.
103 *Slobodna Dalmacija*, February 26, 1991, p. 24.
104 *Slobodna Dalmacija*, March 4, 1991, p. 4.

立を乗り越え、クロアチア国家の建設のために結集させようとするものであった[105]。この理念は、クロアチア内部のクロアチア人だけではなく、ユーゴスラヴィア全体、さらには世界各地のクロアチア人ディアスポラをも視野に入れていた[106]。1990 年 2 月の HDZ 党大会で HDZ アメリカ支部を代表して演説したミシュコ・プリモラツは、「元郷土防衛隊[107]、元パルチザン、元ウスタシャのすべての息子たち」が共に祖国建設のために働くべきであると呼びかけた[108]。一方で「宗教的、社会的、イデオロギー的およびその他の違いによらないすべてのクロアチア人の和解」[109] という方針は、とくに共産主義者の扱いをめぐり、必ずしも HDZ の結成に関わる中心人物の合意を得ていたものではなかった。1989 年春に HDZ の結成が準備されていた段階では、綱領において AVNOJ と ZAVNOH へ言及するか否かという問題や、SKH からの移籍者を HDZ に受け入れるか否かという問題が賛否を呼び、結成準備の中心人物であったヴェセリツァ兄弟らが HDZ 結成直前にトゥジマンと袂を分かつ一因ともなった[110]。

また「国民的和解」は、「他者」であるセルビア人との対比によってクロアチア人の結束を強めようとするものであり、クロアチアのセルビア人の不信感を招く呼びかけでもあった[111]。1990 年 5 月にクロアチア議会選挙の勝利が確定した直後、HDZ 幹部会は、クロアチア議会が開会される 5 月 30 日を「クロアチア民族の自由と主権のために、異なる旗と理念のもとで戦ったすべての人びとの精神的な和解の日」として祝うことを呼びかけた[112]。この記念日が「クロアチア国家の日」とされたことについて SDS のラシュコヴィチは、「国民的な和解の日、したがってウスタシャと主権を有するクロアチアとの和解の日としても」特徴づけられるだろうと述べ、同じく 5 月に行われたブライブルクの追悼式典にも言及しながら、記念日の制定が「セルビア人の間に不安を引き起こしている」と批判した[113]。

トゥジマンは「国民的和解」を語るにあたって完全にクロアチアのセルビア人を無視していたわけではなかった。トゥジマンは、1990 年 7 月に西ドイツの左派系日刊紙『ディー・ターゲスツァイトゥング』のインタビューで、「クロアチア民族の大部分は平和の理念を受け入れたと思います。私は、平和的な共存の必要性を理解し、新しい民主的な政府を承認しているセルビア人住民の一部にもそのような意志が存在していると考えています」と述べたほか、インタビュアーに「クロアチア人とセルビア人が互いに彼らの墓の前でこうべを垂れれば、

105 Đurašković, “National Identity-Building,” p. 776.

106 クロアチア人のウスタシャとパルチザンを射程に入れた「国民的和解」の理念の淵源は、第二次世界大戦後に国外へ逃亡した元ウスタシャの主張にあることが指摘されている。Paul Hockenos, *Homeland Calling: Exile Patriotism and the Balkan Wars* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2003), pp. 46–48.

107 クロアチア独立国軍兵士を指す。

108 *Slobodna Dalmacija*, February 25, 1990, p. 3.

109 *Slobodna Dalmacija*, November 29, 1990, p. 6.

110 Knežević, “Hrvatska demokratska zajednica,” pp. 65–68.

111 Bellamy, *The Formation of Croatian National Identity*, p. 68; Dejan Djokić, “The Second World War II: Discourses of Reconciliation in Serbia and Croatia in the late 1980s and early 1990s,” *Journal of Southern Europe and the Balkans* 4, no. 2 (2002), p. 138.

112 *Slobodna Dalmacija*, May 17, 1990, p. 4.

113 Marinko Čulić, “Čega se boje Srbi,” *Danas*, May 29, 1990, p. 15.

『和解（Befriedung）』になるでしょうか？」と問われると「当然です！公正なのはそれだけでしょう」とも答えた[114]。トゥジマンの言によれば、「国民的和解」はクロアチアが「民主的な社会に到達する」ために必要なステップであった。

「国民的和解」の理念は、SUBNOR を批判して結成された退役兵団体 UHRV にも表れた。トゥジマンは UHRV の結成にあたって、「第一に反ファシズム運動の、そしてまた別の民主的な志向を持つ戦争参加者たちの、統一された退役兵組織が存在することが望ましい――そのような組織は、我々の祖国の民主主義のさらなる発展と、平等な諸民族および彼らの主権を持つ諸共和国の新しい歴史的な合意に大きく貢献しうるだろう」とする肯定的なメッセージを送っていた[115]。また UHRV の結成集会では「戦時および戦後のすべての苦難の犠牲者を忘れてはならず、しかしそれらの事件は学術的に、『勝者の真実』を通してではなく全面的に調査されなければならない」などとする「赦しと和解の呼びかけ」が決議された[116]。戦時中パルチザンと敵対していた勢力の戦争経験者をメンバーとして受け入れるとともに、「勝者」であるパルチザンだけでなく、「敗者」となった勢力の犠牲者をも追悼するべきであると主張した UHRV は、「国民的和解」を体現する組織であったといえるだろう。

リベラル政党の HSLS では、「国民的和解」をめぐって党の主要人物内で異なる見解がみられた。1990 年 5 月にはブライブルクの式典を批判していた党首のブディシャは、ヤゾヴカの発見後には「HSLS は、ヤドヴノの洞穴とソシツェのヤゾヴカの洞穴という大量埋葬地の間の場所に、どの勢力の側で、誰の手によって亡くなったかにかかわらず、すべての戦時と戦後の犠牲者への記念碑を建設することを提案する」と述べた[117]が、この提案は「すべての犠牲者を追悼する」という点において「国民的和解」と同じ性格のものであった。一方で、HSLS の初代党首であったスラヴコ・ゴールドシュタインは、「ヤドヴノやヤセノヴァツには、ソシツェやブライブルクで殺人を犯した人は眠っていないことを決して忘れてはならない。しかしソシツェやブライブルクには、それらのウスタシャの収容所で殺人を犯した人が眠っているかもしれない」と指摘し、ウスタシャの犠牲者とパルチザンの犠牲者を同等視することに警鐘を鳴らしていた[118]。また、ブディシャ自身も 1992 年 4 月には「ウスタシャ、郷土防衛隊、パルチザンの国民的和解、ましてや彼らの息子たちと娘たちの和解」を信じていないと述べた[119]。

1990 年の段階でみられたゴールドシュタインとブディシャの見解の食い違いは、それぞれの個人的な背景にも由来しているだろう。ユダヤ人であるゴールドシュタインは第二次世界大戦中に自らの父親をウスタシャに殺害されており、また 1989 年にはトゥジマンの著書

114 Reinhardt, "„Bund souveräner Republiken“." このインタビュー記事についてユーゴスラヴィアの国営通信社であるタンユグが配信した報道では、„Befriedung“ は „pomirenje“（クロアチア語で「和解」の意）と翻訳されていることから、ここでは「和解」と訳出した。タンユグが配信した記事は『スロボドナ・ダルマチア』を参照した。*Slobodna Dakmacija*, July 29, 1990, p. 6.

115 *Slobodna Dalmacija*, November 10, 1990, p. 7.

116 Ibid.

117 Žanko and Šolić, eds., *Jazovka*, p. 89.

118 Ibid., p. 133.

119 *Slobodna Dalmacija*, April 15, 1992, p. 6.

『歴史的真実の荒野』におけるユダヤ人に関する記述を批判していた[120]。一方第2代党首のブディシャは、「クロアチアの春」において学生運動の指導者として活躍した人物であり、ゴールドシュタインに比べてクロアチア・ナショナリスト的な志向が強い人物であった[121]。

3-3.「市民的和解」

「市民的和解」と呼ぶべきタイプの提案は、共産主義者の犯罪を批判するという点で従来の社会主義的な「クロアチア民族とセルビア民族の友愛」の呼びかけとは異なっており、またセルビア人を「和解」の対象として包摂し、かつウスタシャによる犯罪を明示的に批判するという点で「国民的和解」とは異なっている。このような提案は、先行研究においてはほとんど注目されていないものの、とくに改革的左派および一部のリベラルによる要求として表れていた。

ヤゾヴカの発見が大きな話題となっていた1990年7月、SKH–SDPは第二次世界大戦の歴史をめぐる和解へ向けたアピールを起草し、HDZとSDSの党首に署名を呼びかけた。このアピールの草案は「市民的和解へのアピール（Apel za građansko pomirenje）」と題して週刊誌『ダナス』に掲載された。この草案は「すべての側の罪を糾弾」し、戦時中および戦後の犯罪に関する調査を支持したうえで、「すべての市民の平和的で民主的な共生の精神的および政治的な前提条件のひとつ」として「市民的和解」を呼びかけるものであった[122]。SKH–SDPのイニシアティヴについて、ジャーナリストのイェレナ・ロヴリッチは、直前の7月8日にスロヴェニアで行われた追悼式典と比較して論じている[123]。しかし、スロヴェニアの「国民的和解」がスロヴェニア人どうしの和解を到達地点としていた一方で、SKH–SDP党首のイヴィツァ・ラチャンは、自党のイニシアティヴがクロアチア人とセルビア人という異なる民族間の和解をめざしていることを強調した[124]。またラチャンは、SKH–SDPには「加害者と犠牲者との同等化」や「ファシストと反ファシストの同等化」の意図はないとも述べた[125]。

このアピールは、ファシストの犯罪を糾弾するという点では先に紹介したSUBNORの声明とも共通している。しかしラチャンは、ウスタシャが1941年にセルビア人の大量殺害を行ったグリナおよびパルチザンによる犯罪の象徴的な場となったヤゾヴカを訪問する予定であると述べており[126]、「すべての側の罪を糾弾する」という宣言は、パルチザンによる戦争

120 *Vjesnik (Panorama subotom)*, November 25, 1989, p. 19.

121 Bellamy, *The Formation of Croatian National Identity*, p. 81; Dunja Melčić, "Building Democracy in Croatia since 1990," in Sabrina P. Ramet, Christine M. Hassenstab and Ola Listhaug, eds., *Building Democracy in the Yugoslav Successor States: Accomplishments, Setbacks, and Challenges since 1990* (Cambridge: Cambridge University Press, 2017), p. 193.

122 Lovrić, "Rat oko pomirenja," p. 8.

123 Ibid., p. 7.

124 *Borba*, July 14–15, 1990, p. 11.

125 Ibid.

126 "Racan Proposes 'National Reconciliation'," Zagreb Vjesnik (July 10, 1990), Translation by the Foreign Broadcast Information Service, FBIS Daily Report, East Europe, FBIS-EEU-90-135, July 13, 1990, page 57–58, heading: Yugoslavia, NewsBank, Foreign Broadcast Information Service

犯罪も指していた。このアピールは、SKH の後継政党がパルチザン側の犯罪を認めたという点において画期的ではあった[127]が、SDS の反対により合意に至らず失敗した[128]。ラシュコヴィチは、ヤゾヴカを訪れることに反対した理由として、同地の死者の詳細が判明していないことや、ヤゾヴカが「セルビア人に対する憎悪の醸成」のために政治利用されていることを挙げた[129]。

SKH–SDP は、「市民的和解へのアピール」が頓挫した後にも「市民的和解」という用語を用いた。同党は 1990 年 11 月 3 日に名称を「民主変革党（SDP）」へと変更し、翌週の新聞には SDP の立場を宣言する広告を掲載した。この広告では、SDP が政府に反対する事項として 13 の項目が列挙され、その 12 番目には「クロアチアにおける反ファシズム戦争の伝統とシンボルの放棄に反対する」ことが宣言された[130]。またこの項目では「反ファシズムの伝統は、市民的和解およびさまざまな世界観の人びとの平和的共存に相反するものではない」と述べられ、「ファシズムの崩壊は民主主義の前提条件であった。第二次世界大戦で亡くなったすべての人に安らぎを。しかし反ファシストたちに顕彰と敬意を」と主張された。ここでは、「市民的和解」が「反ファシズム」と両立することを強調したうえで、「国民的和解」との差異化を図ろうとする意図が見受けられる。この意見広告では、同時に「民族間関係に関する宣言」として 8 項目が挙げられた。2 番目の項目では、クロアチア民族が抱いてきた自身の国家を持つという願望がクロアチアでの人民解放戦争において実現されたと述べられるとともに、この人民解放戦争におけるセルビア人の「大きな貢献」も強調された[131]。

「市民的和解」の志向を打ち出したのは SKH の後継勢力だけではなかった。1990 年 10 月に元パルチザンの有志が発表した、SUBNOR と UHRV の対立に対する「クロアチアの人民解放戦争の参戦者へのアピール（Apel sudionicima NOB-a iz Hrvatske）」にも、類似する主張が見出せる[132]。このアピールには、リベラルの代表的人物であるトリパロや、クロアチアのセルビア人であるジヴコ・ユズバシッチのほか、のちにクロアチア紛争時の戦争犯罪によって ICTY に訴追されることになるヤンコ・ボベトコなども名を連ねていた。アピールは、SUBNOR を「ヨーロッパが経験した、また我々がそのただなかにいる根本的な変化を受け入れていない」と批判するとともに、SUBNOR と UHRV の双方が、「民族的・政治的・宗教的帰属にかかわらず、人民解放戦争のすべての参加者と協力者」がメンバーとなり「クロアチア国家の政府との、批判をも含む効果的な協力を達成する」ことなどの条件を備えた組織へと統合することを要求するものであった。一方でこのアピールは、「過去を忘れないようにし、しかしその経験と教訓を未来に向けよう！すべての世代から憎悪と復讐を追放しよ

(FBIS) Daily Reports.

127 Tokić, “Framing and Reframing the Past,” pp. 358–359.

128 *Borba*, July 14–15, 1990, p. 11.

129 *Slobodna Dalmacija*, July 11, 1990, p. 2.

130 *Slobodna Dalmacija*, November 10, 1990, p. 42.

131 Ibid.

132 Živko Juzbašić, *Srpsko pitanje i hrvatska politika: svjedočanstva i dokumenti 1990-2000.* (Zagreb: Prometej, 2009), pp. 431–433; *Slobodna Dalmacija*, October 26, 1990, p. 12. なお、アピールの段階では UHRV は正式に結成されていなかった。そのため、アピールは SUBNOR および「クロアチア退役兵協会イニシアティヴ委員会」に宛てられている。

う！［……］もし記憶を根こそぎ消すことができないとしても、もし彼らが法に反していないのであれば、過去の戦争で対立する側にいたすべての人びとが平和と共同性のうちに暮らしうるということを私たちは信じている」などと呼びかけ、それらを「私たちの子どもたちおよび孫たちのための、クロアチアの地に暮らす諸民族の未来のための市民的および国民的和解の基本的な条件」だと述べた。さらにこのアピールはクロアチア国内のセルビア人にも言及し、セルビア人に「憎しみ、不安、不信の種をまくことを許さず、オープンな議論と合意のなかでの平和な解決を提唱すること」、クロアチア人に「共同の、平和な、数世紀にわたって建設されてきた、隣人かつ同胞市民（sugrađanin）」のセルビア人との共生へ貢献すること」を呼びかけた。

このアピールにも「市民的および国民的和解」という表現があるように、「市民的和解」の要素をもつ議論には、「国民的和解」との共通点がみられる場合もあった。また、UHRVによる「学術的に［……］全面的に調査されなければならない」というメッセージは、少なくとも文章のうえでは「市民的和解へのアピール」や「クロアチア出身の人民解放戦争の参戦者へのアピール」の主張と共通していた。

「市民的和解」の重要な要素である「セルビア人とクロアチア人の和解」という目標をめぐっては、リベラルの間にも論争があった。1990年10月にゴールドシュタインが『ダナス』で発表したアピール文は、クロアチア政府に対して、クロアチア人とクロアチアのセルビア人の間で「市民的平和（građanski mir）」を達成するための方策をとることを求めた。具体的な方策としてゴールドシュタインは、セルビアとクロアチアの相互の憎悪扇動を止めるための「真実の拡散」や、「ウスタシャとチェトニクの糾弾」を挙げたほか、クロアチア政府がセルビア人を含む共和国の全住民の信頼を獲得するために、クロアチアの新憲法の序文においても「ウスタシャのNDHと現代のクロアチアとのいかなるつながりも断ち切る」べきであると提案した[133]。しかし『ダナス』にはすぐさま、第2代HSLS党首のブディシャによる反論が掲載された。ブディシャは、「ゴールドシュタインは、反逆的なセルビア人が『ポリティカ』[134]の出版社のものと反対の情報に金を使うだろうと考えているのだろうか？」などと述べて「真実の拡散」というゴールドシュタインの提案を非現実的であると批判した。彼はさらに、新憲法のなかでは過去に関する議論は不要であるというHSLSの主張を示し、クロアチア独立国に関する文言を新憲法序文に盛り込むというゴールドシュタインの案を否定した[135]。

3-4.「ヨーロッパへの回帰」との関係における和解と反ファシズム

第二次世界大戦への向き合い方における3つの類型はしばしば、目標とすべき存在としてのヨーロッパとの関連において論じられた。「国民的和解」の提言においては、先行事例として西欧諸国の第二次世界大戦後の協調が意識されていた。クロアチアと西欧の歴史的・文

133　Slavko Goldstein, “Apel za građanski mir,” *Danas*, October 9, 1990, pp. 16–17.

134　『ポリティカ』はセルビアの大手日刊紙である。同紙は歴史ある高級紙だったものの、ミロシェヴィチが権力を掌握したのちはセルビア・ナショナリズムを煽動する論調へと変化した。Kurspahic, *Prime Time Crime*, pp. 42–47.

135　Dražen Budiša, “Hrvatska je ponižena,” *Danas*, October 23, 1990, pp. 20–21.

化的つながりを強調していたトゥジマンは、『ディー・ターゲスツァイトゥング』のインタビューで「ヨーロッパではそのような和解はすでに行われています。それらのかつて戦っていた国々は同盟国なだけでなく、友好国です。[……] 私たちは実際クロアチアでもそれを行いました」[136] と述べた。トゥジマンはとりわけ、「ファシストと共産主義者の犠牲者を一緒に埋葬」したフランコ政権下のスペインを「国民的和解」の模範として言及した[137]。トゥジマンが第二次世界大戦の歴史について他のヨーロッパ諸国の事例を参照する際には、クロアチア人どうしの「和解」という目標が前面に押し出され、「反ファシズム」は後景に退けられた。

先行研究では、トゥジマンの反ファシズムへの言及を「リップサービス」にすぎなかったとする主張がある[138] 一方で、トゥジマン自身は「国民的和解」の理念において反ファシズムの要素を重視していたものの、結果として右派によるウスタシャの再評価を招いたとする見方もある[139]。たしかにトゥジマンや HDZ は反ファシズムという理念を完全に放棄したわけではなく、むしろクロアチアの国家建設のための運動であったとして評価していた。この点において、トゥジマンは反ファシズムという理念に「自民族中心主義的な解釈を施してクロアチアの国家的基盤に据えていた」[140] といえる。その一方で、トゥジマンは 1990 年 10 月には「もし『ファシズムの犠牲者広場』を維持するなら、それに匹敵する『共産主義の犠牲者広場』を見つける必要があるでしょう。なぜなら彼ら［共産主義の犠牲者］はファシズムの犠牲者よりも少なくなどないからです」[141] と述べて、「ファシズムの犠牲者広場」改称の正当性を主張した。この発言は、歴史的な文脈を無視して「ファシズムの犠牲者」と「共産主義の犠牲者」を同列に位置づけるものであり、トゥジマンが反ファシズムの理念よりも「国民的和解」を優先していたことを示しているといえよう。

一方で、社会主義期のイデオロギーを固持していた SUBNOR は、反ファシズムが「ヨーロッパの遺産」であるという主張を、HDZ によるクロアチアの「人民解放戦争の遺産の破壊」への批判の根拠とした。この「ヨーロッパ」と反ファシズムを結びつける論理は、改革的左派やパルチザンの戦争犯罪を批判する改革的左派やリベラルな政治勢力にも共有されていた。SDP の意見広告は、「反ファシズムは、現代ヨーロッパの基礎的な民主的遺産である」と述べた[142]。またダプチェヴィチ＝クチャルは、選挙後に結成されたクロアチア国民党

136 Reinhardt, “„Bund souveräner Republiken“.”

137 Ibid. トゥジマンは 1996 年のインタビューで、ヤセノヴァツ強制収容所の跡地を「すべての戦争犠牲者の場所」とすることを提唱し、「ブライブルクの虐殺」の犠牲者などの「共産主義の犠牲者」の遺骨をヤセノヴァツに改葬することをも示唆した。トゥジマンはこのインタビューにおいても、モデルとしてフランコ政権下のスペインに言及している。*Vjesnik*, April 23, 1996, p. 5; “Intervju predsjednika Franje Tuđmana 20. travnja 1996.” [https://hr.wikisource.org/wiki/Intervju_predsjednika_Franje_Tu%C4%91mana_20._travnja_1996.]（2022 年 7 月 4 日閲覧）. ただしこの発言は国内外で批判を浴び、トゥジマンの構想は実現しなかった。Banjeglav, “Sjećanje na rat ili rat sjećanja?,” p. 108.

138 Radonić, “Croatia’s Politics of the Past during the Tuđman Era (1990–1999),” p. 252.

139 Đurašković, “National Identity-Building,” p. 780.

140 門間「ヤセノヴァツ追悼式典」29 頁。

141 *Slobodna Dalmacija*, October 17, 1990, p. 32.

142 *Slobodna Dalmacija*, November 10, 1990, p. 42.

(Hrvatska narodna stranka)の党首としてユーゴスラヴィアの日刊紙『ボルバ』のインタビューに答え、「ファシズムは、ボリシェヴィズムと並んで 20 世紀の最大の汚点です」と述べ、反ファシズムを放棄することは「非人間的であるだけでなく、政治的に愚かでもあります」と主張した[143]。このインタビューで、ダプチェヴィチ＝クチャルは反ファシズムについて「それのおかげで近代的で民主的なヨーロッパが建設されたのです」とも述べた。

またリベラルな政治勢力は「国民的和解」について、クロアチアの独立への支持獲得というプラグマティックな側面から、西側からの視線を意識した批判を展開した。トリパロは、クロアチアの独立宣言に対する国際的な反応に言及しながら、「もし西側が理解するところの民主主義が危機に晒されたら、現存する私たちに対する留保がさらに大きくなるでしょう。クロアチアでは反ファシスト闘争に対する、あるいはよりよく言えば NDH に対する態度にこれが当てはまりますが、もちろんそれ［NDH］に対しては反対の立場をとらなければいけないでしょう」[144]と述べた。これはフランコ政権下のスペインを模範とするトゥジマンとは意見を異にするものであり、ヨーロッパとの関わりのなかで反ファシズムの理念の重要性を強調する主張であった。

クロアチアのジャーナリストによる議論や市民社会における運動にも、反ファシズムの理念の重要性をヨーロッパに引きつけて訴えるものがみられた。ジャーナリストのダンコ・プレヴニクは、ウスタシャの犠牲者と共産主義者の犠牲者を同等視することを批判した際に、ファシズムの犠牲者広場の改称に言及して、トゥジマンが「［改称という］自らの過ちを修正することができるのだとヨーロッパに示す」必要があると論じた[145]。

ザグレブの「ファシズムの犠牲者広場」の改称については、市民の抗議運動においても、現代のヨーロッパも「反ファシズム連合の上に成立している」という認識に基づいた「ヨーロッパ」への言及が頻繁にみられた[146]。1990 年 12 月には、「ファシズムの犠牲者広場のための行動委員会（Odbor akcije za Trg žrtava fašizma）」が組織され[147]、イヴァン・ズヴォニミル・チチャクや、HSLS の創設者のひとりでスラヴコ・ゴールドシュタインの弟であるダニエル・イヴィンなどがメンバーに名を連ねた[148]。委員会はザグレブ市長とザグレブ市議会に宛てた公開書簡で、「広場の改称は、ファシズムに対する戦いの価値の否定とファシズムの犠牲者への敬虔さの放棄を意味する」と主張した[149]。ただし、この公開書簡は同時に、「クロアチア民族の疑似ファシスト性（fašistoidnost）とジェノサイド性についての主張は愚かであり、虚偽である」として、クロアチア人の民族性とウスタシャによる大量殺害を結びつける本質主義的な議論を批判した。

「ファシズムの犠牲者広場のための行動委員会」は、「ファシズムの犠牲者広場」の名称復

143 *Borba*, November 24–25, 1990, p. 4.
144 Begić, “Oprezno,” p. 23.
145 Danko Plevnik, “Neshvatljiv inat,” *Danas*, April 23, 1991, p. 31.
146 Danica Juričić, “Žrtvovanje trga fašizma,” *Danas*, May 14, 1991, p. 65.
147 結成当初の報道では、名称は「ファシズムの犠牲者広場名称復活のための組織委員会（organizacioni odbor za vraćanje imena Trga žrtava fašizma）」とされた。*Slobodna Dalmacija*, December 13, 1990, p. 32.
148 Juričić, “Žrtvovanje trga fašizma,” p. 65.
149 *Slobodna Dalmacija*, March 14, 1991, p. 12.

活を求めるデモ集会を 1991 年 5 月 9 日に行った。抗議運動の日として 5 月 9 日が選ばれたのは、この日がユーゴスラヴィアにおける戦勝記念日であるほかに「ヨーロッパの日」でもあるからであった [150]。「欧州の歌とともに始ま」ったこの日の集会では、クロアチアの国旗のほかにヨーロッパの旗およびユーゴスラヴィアの国旗が掲げられるなど、ヨーロッパ志向が示された [151]。広場の名称復活を求める抗議運動は 2000 年まで毎年行われ、政権交代後の 2000 年 12 月に名称が復活することとなる [152]。

一方で、反ファシズムの理念とヨーロッパを結びつける言説においても、「ヨーロッパ」と「バルカン」の二項対立が表れた。「ファシズムの犠牲者広場のための行動委員会」のアピールは、「兄弟殺しの衝突におけるこちら側かあちら側の勝利」ではなく、「憎悪、分裂、そしてその他のあらゆるバルカン的な災難に対する勝利」を呼びかけた [153]。

3-5. 和解とクロアチア国内のセルビア人

クロアチア国内のセルビア人の間では、「和解」に対してしばしば批判的な意見がみられた。すでに本論文の随所で触れてきたように、SDS 党首のラシュコヴィチは、HDZ が呼びかける「国民的和解」に対しては「ウスタシャとの和解」であるとして、SKH–SDP が提案した「市民的和解へのアピール」に対してはヤゾヴカの反セルビア人的な「政治利用」を理由として、それぞれ批判的であった。またラシュコヴィチやバビッチは、トゥジマン政権をしばしばクロアチア独立国と結びつけ、クロアチア政府が共和国内のセルビア人を迫害していると批判していた [154]。その一方でクロアチアの急進的なセルビア人のなかでは、チェトニクとパルチザンの対立を乗り越えるべきであるという、セルビアにおける「国民的和解」に類似した主張がみられた [155]。このような動向は、1980 年代後半以降のセルビア本国における第二次世界大戦の歴史の見直しの潮流や、「ウスタシャの再来」の恐怖を煽る言説と軌を一にしていた [156]。

---

150 Juričić, “Žrtvovanje trga fašizma,” p. 65; Vjeran Pavlaković, “Conflict, Commemorations, and Changing Meanings: The Meštrović Pavilion as a Contested Site of Memory,” in Davor Pauković, Vjeran Pavlaković, and Višeslav Raos, eds., *Confronting the Past: European Experiences* (Zagreb: Political Science Research Centre, 2012), p. 335. なお、「ヨーロッパの日」としての 5 月 9 日は 1950 年のシューマン宣言に由来しており、旧ソ連・東欧諸国の第二次世界大戦戦勝記念日とは無関係である。

151 Juričić, “Žrtvovanje trga fašizma,” p. 65.

152 歴史家のヴィエラン・パヴラコヴィチは、この反対運動がクロアチアにおける「親ヨーロッパ（EU）的な政治プラットフォーム」につながったと評価している。Pavlaković, “Conflict, Commemorations, and Changing Meanings,” p. 337.

153 *Slobodna Dalmacija*, March 23, 1991, p. 4.

154 例として、以下を参照。Рашковић, “ Шта „ Данас “ не сме да објави ,” p. 29; “ Говор др Милана Бабића,” *НИН*, March 1, 1991, p. 11.

155 Nikica Barić, *Srpska pobuna u Hrvatskoj 1990–1995.* (Zagreb: Golden marketing-Tehnička knjiga, 2005), pp. 441–442.

156 Davor Pauković, “The Role of History in Legitimizing Politics in the Transition Period in Croatia,” in Davor Pauković, Vjeran Pavlaković, and Višeslav Raos, eds., *Confronting the Past: European Experiences*, (Zagreb: Political Science Research Centre, 2012), pp. 210–212; Jurić, “Jasenovačke žrtve,” p. 232.

クロアチアのセルビア人のなかには、SDS の急進的なセルビア人ナショナリズムを批判し、クロアチア人に対してより協力的なアプローチをとるセルビア人も存在した。しかし、クロアチアにおける「和解」の提言に対する不満は、そうしたより穏健なセルビア人からも表明された。1990 年 9 月には、セルビア人が人口の多数派を占めるペトリニャで SKH–SDP の支部が解散した。この解散にあたってペトリニャ支部では、SKH–SDP 指導部が「クロアチアのセルビア人の地位についての問題に対して受け入れがたい立場をとった」ことが批判されただけでなく、「ヤゾヴカとグリナの教会での虐殺を同等視したし、その 2 つの場所で犠牲者と加害者の和解の行動が実行されるイニシアティヴの提唱者であった」とも述べられ、指導部が 7 月に起草した第二次世界大戦に対する「市民的和解のためのアピール」も批判された [157]。この批判は、当時クロアチアのセルビア人が SKH–SDP に抱いた失望には、同党の第二次世界大戦に対する「市民的和解」を推進する姿勢も関係していたことを示唆している。

SKH–SDP の主要党員のひとりであったセルビア人のスィモ・ライッチもまた、1991 年 1 月にクロアチアにおける「反ファシズムとファシズムの同等視」を批判した。ライッチは、クロアチア共和国幹部会が組織したクロアチアのセルビア人の文化的自治に関するワーキンググループに参加するなど、セルビア人の権利の擁護に尽力していた [158] ものの、セルビア人政党の SDS とは敵対関係にあった [159]。1990 年 8 月からクロアチア議会副議長を務めていたライッチは、同党が SDP に改称した際には SDP 幹部会にも名を連ねた [160] が、1991 年 1 月に議会副議長および議会内・SDP 党内のすべての役職を降りることを表明した。ライッチは 1990 年 12 月の新憲法制定にあたって、セルビア人の権利を擁護するための修正案を歴史家のドラーゴ・ロクサンディチとともに作成したが、この案に対して SDP からの支持を得られなかったことが、彼の辞意を固める決定打となった [161]。ライッチは副議長辞任の際、議長のジャルコ・ドムリャンへ宛てた書簡で「ファシズムに反対する公的で宣言的な表明の例も多くある一方で、もっとも穏やかに言っても、ファシズムを再評価するとともに、民主的な遺産で現在および将来のヨーロッパの礎でもあり、またあらゆる権力の民主的な正統性でも文明的な正統性でもある反ファシズムとそれ［ファシズム］を同等視しようとする手続きや行動の事実上の容認の例も多くある」と論じた [162]。またライッチは、自身が重点を置いていたセルビア人の権利の擁護に関しては SDP への不満をあらわにした。彼は SDP 幹部会にあてた書簡で、同党が「エスニックにほとんど純粋な党」になっており、クロアチアのセルビア人の危機的な状況への対処に非協力的であると批判した [163]。

上記の事例が示すように、1990 年代初頭に出現したさまざまな「和解」の提言は、それぞれが意図したようにクロアチア内部のイデオロギー的・民族的分断を埋めるものではな

157　*Borba*, September 14, 1990, p. 3.
158　*Slobodna Dalmacija*, November 6, 1990, p. 2.
159　*Slobodna Dalmacija*, August 26, 1990, p. 4.
160　*Slobodna Dalmacija*, November 10, 1990, p. 42.
161　Simo Rajić, *Između Hrvata i Srba: Ostati svoj u olovnim vremenima nije bilo lako* (Zagreb: Profil, 2017), p. 143.
162　*Slobodna Dalmacija*, January 5, 1991, p. 4.
163　Ibid.

かった。「国民的和解」が左派・リベラルやセルビア人から批判される一方、セルビア人をも取り込む形で「市民的和解」を提言したSKH–SDPや、HDZのナショナリスト的な記憶政策を批判したHSLSの内部にも対立が存在した。とりわけクロアチアのセルビア人にとっては、「国民的和解」はもとより、「市民的和解」もまた不満をもたらす構想であった。

おわりに

本論文は、冒頭で立てた「1980年代末から1990年代初頭のクロアチアにおいて、当時の政治情勢と第二次世界大戦の歴史がどのように結びつけられ、その過去に対する向き合い方が模索されたのか」という問いについて、以下の3点を明らかにした。

第1に、クロアチア紛争が勃発する前の段階では、第二次世界大戦の歴史をめぐるイデオロギー的あるいは民族的な分断を克服する方策には大きく3つの類型が存在した。すなわち、①社会主義体制の公的な歴史観を継承し、「反ファシズム」を強調するもの、②ナショナリストの、クロアチア人の犠牲を強調するとともにクロアチア人どうしの「国民的和解」をめざすもの、③改革的左派の、ウスタシャと共産主義者双方の犯罪を糾弾してセルビア人を含めたクロアチア国民全体の「市民的和解」を呼びかけるものである。リベラル勢力はウスタシャに対する再評価を強く批判した一方で、「国民的和解」に対する態度には揺らぎが存在した。

第2に、クロアチアでは「ヨーロッパへの回帰」という理念が、それぞれの勢力において異なる形で第二次世界大戦の歴史との向き合い方を規定した。ナショナリストは、社会主義期の国家の正統性の基盤であった「反ファシズム」の意味を変容させ、「国民的和解」を経た国民国家の建設を「ヨーロッパへの回帰」と結びつけた。一方で、守旧派のSUBNORと改革的左派・リベラルはウスタシャの再評価を批判し、「反ファシズム」を「ヨーロッパの礎」とみなす立場を共有していた。しかし共産主義者による犯罪に対する態度という点では、SUBNOR、改革的左派、リベラルはそれぞれ異なっていた。「ヨーロッパ」における第二次世界大戦の過去に対する向き合い方が参照される場合は、どの事例を参照し、何をクロアチアの模範として取り出すかという点においては、それぞれの勢力がクロアチアの体制転換において優先していた目標の違いが反映された。

第3に、クロアチア人を第一義的な包摂の対象とした「国民的和解」のみならず、クロアチアのセルビア人を包摂しようとした「市民的和解」もまた、当のクロアチアのセルビア人にとっては受け入れがたいものであった。クロアチアのセルビア人にとっては、ファシズムを明示的に糾弾しながらも「すべての死者への追悼」を推進する「市民的和解」は、すべての犠牲者を同等であるとする発想に接近しうるという点で「国民的和解」と類似していた。

本論文は1980年代末から90年代初頭のクロアチアを対象としたが、その後は1990年代を通して、トゥジマン政権下の「国民的和解」を軸とした記憶政策が進められた。「はじめに」で述べたように、この状況は2000年の政権交代を機にEU加盟をにらんで大きく変化したが、このとき用いられた、「ヨーロッパの基盤」である反ファシズムをクロアチア国家の基盤として強調するというレトリックは、本論文でとりあげた紛争前の改革的左派やリベラルのレ

トリックと共通していた[164]。その一方で、2000 年から 2003 年まで首相を務め、EU 加盟への歩を進めることに成功したラチャンは、2002 年 4 月にクロアチア首相として初めてヤセノヴァツにおける追悼式典に参加したが、同年 5 月にはブライブルクにも訪問した。紛争前には「市民的和解」を主張したラチャンの振る舞いにも、連邦解体や紛争に伴うクロアチア社会の大きな変化を受けて「国民的和解」への接近がみられたといえよう[165]。さらに EU 加盟後には、クロアチアにおけるウスタシャの再評価の広がりに反発した反ファシズム組織やセルビア人団体、ユダヤ人団体などが、2016 年から 2019 年まで、政府が開催する毎年 4 月のヤセノヴァツでの追悼式典への参列をボイコットして別個に追悼式典を行うという事態が生じた[166]。このような独立後のクロアチアでの動向は、本論文が分析した「ヨーロッパへの回帰」という志向と「和解」の論理が、その後のクロアチアにおいても異なる形で結びつきながら、第二次世界大戦をめぐる記憶の政治を規定していることを示しているだろう。

付記：本論文は JSPS 科研費課題番号 21J21362 の助成を受けた研究成果の一部である。

164　ただし、本論文でとりあげた SUBNOR のように「民族間の友愛」と反ファシズム運動を結びつける主張は、2000 年以降のクロアチア政府や議会による反ファシズムをめぐる記憶政策とは大きく異なる。むしろ 2000 年以降のクロアチアでは、反ファシズムの理念は社会主義ユーゴスラヴィアを「全体主義」であると非難する主張に結びつけられた。Milošević and Touquet, “Unintended Consequences,” p. 389; 門間「ヤセノヴァツ追悼式典」30–31 頁。

165　石田「クロアチア共和国」63 頁。

166　門間「ヤセノヴァツ追悼式典」31–32 頁。2020 年 4 月には、反ファシズム組織やセルビア人団体・ユダヤ人団体・ロマ団体の代表と政府の代表が 5 年ぶりに合同で式典を行った。しかし 2021 年 4 月には新型コロナウイルス感染症などを理由として、アンドレイ・プレンコヴィチ首相の代表団、ゾラン・ミラノヴィチ大統領の代表団、反ファシズム組織および民族マイノリティ団体の代表団が、それぞれ時間をずらして献花を行った。Anja Vladisavljevic, “Croatia Remembers Victims of WWII Jasenovac Camp” [https://balkaninsight.com/2020/04/22/croatia-remembers-victims-of-wwii-jasenovac-camp/]; Anja Vladisavljevic, “‘Tragic Period in Croatian History’ Commemorated at Jasenovac Camp” [https://balkaninsight.com/2021/04/22/tragic-period-in-croatian-history-commemorated-at-jasenovac-camp/] (2021 年 12 月 24 日閲覧).

Croatian Politics of Memory of the Second World War in the Period of Democratization: The Logics of Reconciliation and the "Return to Europe"

Uno Mayuko

With growing interest in the politics of memory of the Second World War (WWII) in Central and Eastern European countries, scholars of Croatian politics and contemporary history have explored the historical revisionism that flourished under President Franjo Tuđman in the 1990s, changes in the official narrative after 2000, and the resurgence of nationalism after Croatia's entrance to the EU. Still, little attention has been paid to a dispute over the idea of reconciliation in the early 1990s. This article focuses on this politicization of WWII memory in the early period of democratization. In doing so, I address the discourse of "returning to Europe" and the calls for reconciliation made by a broad range of political actors in the late 1980s and early 1990s.

Upon the establishment of the Independent State of Croatia in April 1941 with the help of Nazi Germany and Fascist Italy, the far-right Croatian nationalist organization Ustaša ruled this puppet state and engaged in the mass killing of Serbs, Jews, and Roma during the war. Yugoslavia was liberated by the Yugoslav Partisans under the command of communists in 1945, who also committed atrocities during the war and in its immediate aftermath. The official narrative of WWII in Socialist Yugoslavia juxtaposed the heroic Partisans against the fascist and collaborationist enemies. During the socialist period, the WWII veterans' union SUBNOR played a key role in shaping the official narrative. In the 1980s, the official narrative gradually lost its legitimacy and fierce debates over WWII ensued.

New political parties that emerged in Croatia from 1989 to 1990 shared a consensus in favor of Croatian integration into Europe, although the strategies of achieving this goal differed significantly among them. While nationalist parties claimed Croatia as an essential part of Western Europe and devoted themselves to building the Croatian nation-state, liberal parties and the reformed communists insisted on making a democratic state embracing such Western values as liberalism and human rights. After the victory of the nationalist party, the Croatian Democratic Union (hereafter "HDZ"), at the election in the spring of 1990, memory politics took on a nationalist proclivity. The opposition parties often chastised the HDZ's politics of memory, which was epitomized by their protests against the renaming of the "Square of the Victims of Fascism" in Zagreb as the "Square of Croatian Great Men."

This article identifies three groups involved in the disputes over the narrative of WWII in the late 1980s and early 1990s. The first group was those adhering to the official communist story enshrining the heroic Partisans and stressing "brotherhood and unity" among the nations in Yugoslavia. SUBNOR continued to promote this ideal in the late 1980s and early 1990s, which did not help them keep their prestige. A split in the WWII veterans' union in Croatia and the subsequent controversy between SUBNOR and the newly formed veterans' association UHRV also indicate that the legitimacy of the communist narrative withered in the early 1990s. The second group was those nationalists promoting "national reconciliation" among the Croats both at home and abroad. This discourse of "national reconciliation" eventually dominated the official policy of memory in the 1990s.

Its proponents attempted to solve the ideological conflict between the Partisans and Ustaša by arguing that both forces had struggled for a common goal of building a Croatian state. This argument could lead to the relativization and rehabilitation of the Independent State of Croatia and Ustaša. The third group was the reformed communists calling for "civil reconciliation" with a view toward encompassing all Croatian citizens regardless of their ethnicity. In July 1990 after the rise of controversy over the exhumation of those inhumed in the Jazovka Pit, the reformed communist party, League of Communists of Croatia–Party of Democratic Change, announced a draft of an appeal for civil reconciliation, but ultimately failed to implement it. The crux of "civil reconciliation" was to condemn both fascists and communists for their crimes, while endorsing anti-fascism as the foundation of modern and democratic Europe. Liberal politicians and intellectuals also denounced nationalists' policy of memory as escalating the oblivion of anti-fascism and the rehabilitation of Ustaša. Yet the liberals did not come to a consensus on reconciliation, either: while some at least temporarily accepted the idea of national reconciliation, others were afraid of equating victims of fascism with those of communism without taking the relevant historical contexts into account. Thus, these three groups used the notion of anti-fascism and the discourse of "return to Europe" in distinct manners. The nationalists reinterpreted anti-fascism in Croatia as a movement for Croatian national independence and attached it to "national reconciliation." Tuđman justified the act of "national reconciliation" by invoking precedents of national reconciliation elsewhere in Europe. In contrast, SUBNOR, the reformed communists, and the liberals regarded anti-fascism as making Croatia a modern and democratic European country.

Meanwhile, most of the Croatian Serbs, the largest ethnic minority in Croatia, did not comply with the calls for reconciliation in Croatia. While the separatist Serbs claimed that the policy of the HDZ government was similar to that of the Independent State of Croatia, more moderate Serbs accused the Croats of allowing the rehabilitation of fascism. Although the appeal for civil reconciliation should have embraced the Croatian Serbs, they dismissed it as equating the victims of fascism with those of communism. The Croats' aspirations to commemorate all victims deterred the Croatian Serbs from supporting the calls for "national reconciliation" and for "civil reconciliation."